

## 基本計画書

基本計画書									
事項	記入欄								備考
計画の区分	学部設置								
フリガナ設置者	ガッコウホウジン オオツマガクイン 学校法人大妻学院								
フリガナ大学の名称	オオツマジョシダイガク 大妻女子大学								
大学本部の位置	東京都千代田区三番町12番地								
大学の目的	<p>本学は教育基本法に基づき、学校教育法の定めるところに従い、広く知識を授けると共に深く専門の学芸を教授研究して、応用的能力の展開と人格の完成に努め、高い知性と豊かな情操を有する女性の育成を目的とする。</p>								
新設学部等の目的	<p>データを収集・整理・分析・活用して、様々な場面で多様な人々と協働し、リーダーシップを発揮しながらビジネスや社会の課題を発見し解決できる文理融合人材の育成を目指す本学部は、実技実学重視のもと教育・研究を追求してきた本学の伝統を今目的に継承・発展させるものである。本学部において統計・数理、情報と経済、経営を学ぶことにより、多様なライブイベントを経験することが多い女性が、転職や休職等を乗り越えて生涯を通じて自立して学び働き続けることができるよう支援することで、本学中期計画の「大妻学院の使命」の第一にある「学び働き続ける自立自存の女性の育成」を実現する。</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地
	データサイエンス学部	年	人	年次人	人	学士（データサイエンス）	工学関係 経済学関係	年月 第年次 令和7年4月 第1年次	東京都千代田区 三番町12番地
	データサイエンス学科	4	90	3年次-	360				
	計		90	3年次-	360				
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）	<p>大妻女子大学短期大学部 国文科（廃止）（△45） 英文科（廃止）（△45） ※令和6年4月学生募集停止 家政科生活総合ビジネス専攻（廃止）（△70） ※令和7年4月学生募集停止 家政科家政専攻（廃止）（△90） 家政科食物栄養専攻（廃止）（△100） ※令和7年4月学生募集停止、家政科家政総合コース（35）、家政科食と栄養コース（55）の2コース制を開設予定。</p>								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数					卒業要件単位数		
		講義	演習	実験・実習	計				
	データサイエンス学部 データサイエンス学科	134科目	72科目	7科目	213科目	124単位			

学部等の名称		基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)	
		教授	准教授	講師	助教	計			
新 設 分	データサイエンス学部 データサイエンス学科	11人 (11)	2人 (2)	1人 (1)	0人 (0)	14人 (14)	0 (0)	159 (159)	大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 10人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (10)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	14 (13)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計(a~b)	11 (10)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	14 (13)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (1)			
	計(a~d)	11 (11)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	14 (14)			
計	11 (11)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	14 (14)	0 (0)			— (—)
既 設 分	家政学部 被服学科	7 (7)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	11 (11)	6 (6)	195 (195)	大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 6人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	11 (11)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計(a~b)	7 (7)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	11 (11)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計(a~d)	7 (7)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	11 (11)			
家政学部 食物学科	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	18 (18)	12 (12)			209 (209)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	18 (18)				
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
小計(a~b)	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	18 (18)				
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計(a~d)	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	18 (18)				

既	家政学部 児童学科	11 (11)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	18 (18)	3 (3)	208 (208)	大学設置基準別 表第一イに定め る基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	18 (18)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	11 (11)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	18 (18)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	11 (11)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	18 (18)			
設	家政学部 ライフデザイン学科	4 (4)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	11 (11)	3 (3)	178 (178)	大学設置基準別 表第一イに定め る基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	4 (4)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	11 (11)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	4 (4)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	11 (11)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	4 (4)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	11 (11)			
分	文学部 日本文学科	9 (9)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	195 (195)	大学設置基準別 表第一イに定め る基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	9 (9)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	9 (9)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			

既	文学部 英語英文学科	8 (8)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	197 (197)	大学設置基準別 表第一イに定め る基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	13 (13)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	8 (8)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	13 (13)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	8 (8)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	13 (13)			
設	文学部 コミュニケーション文化学科	4 (4)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (10)			0 (0)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	4 (4)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (10)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	4 (4)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (10)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	4 (4)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (10)			
分	社会情報学部 社会情報学科	23 (23)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	34 (34)			0 (0)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	22 (22)	8 (8)	2 (2)	0 (0)	32 (32)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (2)			
	小計（a～b）	23 (23)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	34 (34)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	23 (23)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	34 (34)			

既	人間関係学部 人間関係学科	11 (11)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	17 (17)	1 (1)	96 (96)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 9 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	17 (17)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	11 (11)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	17 (17)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	11 (11)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	17 (17)			
設	人間関係学部 人間福祉学科	9 (9)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	11 (11)			1 (1)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	11 (11)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	9 (9)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	11 (11)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	9 (9)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	11 (11)			
分	比較文化学部 比較文化学科	16 (16)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	19 (19)			0 (0)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	16 (16)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	19 (19)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	16 (16)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	19 (19)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	16 (16)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	19 (19)			
計	113 (113)	40 (40)	22 (22)	0 (0)	175 (175)	26 (26)			— (—)
合計	124 (124)	42 (42)	23 (23)	0 (0)	189 (189)	26 (26)	— (—)		

職 種		専 属		その他		計			
事 務 職 員		143人 (143)		65人 (65)		208人 (208)			
技 術 職 員		4 (4)		11 (11)		15 (15)			
図 書 館 職 員		13 (13)		5 (5)		18 (18)			
そ の 他 の 職 員		0 (0)		0 (0)		0 (0)			
指 導 補 助 者		39 (39)		0 (0)		39 (39)			
計		199 (199)		81 (81)		280 (280)			
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計			
	校 舎 敷 地	29,336.39㎡	70,721.18㎡	0.00㎡		100,057.57㎡			
	そ の 他	13.61㎡	3,833.54㎡	0.00㎡		3,847.15㎡			
	合 計	29,350.00㎡	74,554.72㎡	0.00㎡		103,904.72㎡			
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計			
		30,149.40㎡ (30,149.40㎡)	46,244.27㎡ (46,244.27㎡)	792.49㎡ (792.49㎡)		77,186.16㎡ (77,186.16㎡)			
教 室 ・ 教 員 研 究 室		教 室	280室	教 員 研 究 室		14室			
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕		学術雑誌 〔うち外国書〕		機械・器具 点	標本 点		
		冊	電子図書 〔うち外国書〕	種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕				
	データサイエンス学部 データサイエンス学科	446,083 [82,839] (425,403 [82,359])	3,033 [164] (2,033 [164])	8,871 [4,157] (8,871 [4,157])	2,787 [2,717] (2,787 [2,717])	12,536 (12,536)	0 (0)		
	計	446,083 [82,839] (425,403 [82,359])	3,033 [164] (2,033 [164])	8,871 [4,157] (8,871 [4,157])	2,787 [2,717] (2,787 [2,717])	12,536 (12,536)	0 (0)		
スポーツ施設等		スポーツ施設		講堂		厚生補導施設			
		4,936.82㎡		2,523.72㎡		3,323.40㎡			
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次
		教員1人当り研究費等		410千円	410千円	410千円	410千円		
		共同研究費等		39,522千円	39,522千円	39,522千円	39,522千円		
		図書購入費	387千円	918千円	1,833千円	2,815千円	3,840千円		
	設備購入費	99,968千円	2,278千円	4,555千円	6,832千円	9,109千円			
	学生1人当り納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	
		1,505千円	1,375千円	1,395千円	1,415千円	—千円	—千円		
学生納付金以外の維持方法の概要		私立大学等経常費補助金、資産運用収入、大学・高専成長分野転換支援基金助成金、雑収入等							

既設大学等の状況	大学等の名称		大妻女子大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度	所在地	
		年	人	年次人	人		倍			
	家政学部						1.03 《1.02》		東京都千代田区三番町12番地	
	被服学科	4	110	3年次 7	454	学士 (家政学)	1.01 《0.99》	昭和43年度		
	食物学科		130		520		1.03 《1.02》			
	食物学専攻	4	80	—	320	学士 (家政学)	1.02 《1.01》	昭和24年度		同上
	管理栄養士専攻	4	50	—	200	学士 (家政学)	1.04 《1.04》	昭和24年度		同上
	児童学科		130		530		1.05 《1.05》			
	児童学専攻	4	80	—	320	学士 (家政学)	1.03 《1.03》	昭和43年度		同上
	児童教育専攻	4	50	3年次 5	210	学士 (家政学)	1.09 《1.09》	昭和43年度		同上
	ライフデザイン学科	4	120	3年次 7	494	学士 (家政学)	1.03 《1.02》	平成14年度		同上
	文学部						1.02 《1.00》		同上	
	日本文学科	4	120	3年次 7	494	学士 (文学)	1.05 《1.02》	昭和42年度		
	英語英文学科	4	120	3年次 7	494	学士 (文学)	0.98 《0.96》	昭和42年度		
	コミュニケーション文化学科	4	120	3年次 7	494	学士 (文学)	1.02 《1.01》	平成14年度	同上	
	社会情報学部						1.02 《1.00》		同上	
	社会情報学科		300		1,230		1.02 《1.00》			
	社会生活情報学専攻	4	100	3年次 5	410	学士 (社会情報学)	1.01 《1.00》	平成4年度		
	環境情報学専攻	4	100	3年次 5	410	学士 (社会情報学)	1.01 《0.99》	平成4年度		
	情報デザイン専攻	4	100	3年次 5	410	学士 (社会情報学)	1.04 《1.03》	平成4年度	同上	
	人間関係学部						1.04 《1.03》		東京都多摩市唐木田2丁目7番地1	
	人間関係学科		160		656		1.12 《1.10》			
	社会学専攻	4	80	3年次 4	328	学士 (人間関係学)	1.13 《1.12》	平成11年度		
	社会・臨床心理学専攻	4	80	3年次 4	328	学士 (人間関係学)	1.11 《1.08》	平成11年度		
	人間福祉学科	4	100	3年次 2	404	学士 (人間関係学)	0.92 《0.90》	平成11年度	同上	
	比較文化学部						1.03 《1.01》		東京都千代田区三番町12番地	
比較文化学科	4	165	3年次 5	670	学士 (比較文化学)	1.03 《1.01》	平成11年度			

既設大学等の状況	大妻女子大学大学院 人間文化研究科 (博士後期課程) 人間生活科学専攻	3	3	—	9	博士 (生活科学)	0.88 《0.77》	平成22年度	東京都千代田区三番町12番地	
	言語文化学専攻  (修士課程)	3	3	—	9	博士 (文学)	0.33 《0.11》	平成22年度	同上	
	人間生活科学専攻	2	12	—	24	修士 (生活科学)	0.79 《0.62》	平成22年度	同上	
	言語文化学専攻	2	8	—	16	修士 (文学)	0.75 《0.75》	平成22年度	同上	
	現代社会研究専攻	2	6	—	12	修士 (社会学)	0.25 《0.16》	平成22年度	東京都千代田区三番町12番地	
	臨床心理学専攻	2	6	—	12	修士 (心理学)	1.41 《1.25》	平成22年度	東京都多摩市唐木田2丁目7番地1 同上	
	大 学 等 の 名 称	大妻女子大学短期大学部								
学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	取容 定員	学位又 は称号	取 容 定 員 充 足 率	開 設 年 度			
	年	人	年次 人	人		倍				
短期大学部										
家政科										
家政専攻	2	—	—	—	短期大学士 (家政学)	—	昭和25年度	東京都千代田区三番町12番地	※令和7年度より 学生募集停止	
生活総合ビジネス専攻	2	—	—	—	短期大学士 (家政学)	—	平成23年度	同上	※令和7年度より 学生募集停止	
食物栄養専攻	2	—	—	—	短期大学士 (家政学)	—	昭和25年度	同上	※令和7年度より 学生募集停止	
家政総合コース	2	35	—	70	短期大学士 (家政学)	—	令和7年度	同上	※令和7年度より 開設予定	
食と栄養コース	2	55	—	110	短期大学士 (家政学)	—	令和7年度	同上	※令和7年度より 開設予定	
国文科	2	—	—	—	短期大学士 (文学)	—	昭和42年度	同上	※令和6年度より 学生募集停止	
英文科	2	—	—	—	短期大学士 (文学)	—	昭和42年度	同上	※令和6年度より 学生募集停止	
附属施設の概要	該当なし									

# 学校法人大妻学院 設置認可等に関わる組織の移行表

令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員		令和7年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
<b>大妻女子大学</b>				→	<b>大妻女子大学</b>				
家政学部		3年次			家政学部		3年次		
被服学科	110	7	454		被服学科	110	7	454	
食物学科	80	-	320		食物学科	80	-	320	
食物学専攻					食物学専攻				
管理栄養士専攻	50	-	200		管理栄養士専攻	50	-	200	
児童学科	80	-	320		児童学科	80	-	320	
児童学専攻					児童学専攻				
児童教育専攻	50	5	210		児童教育専攻	50	5	210	
ライフデザイン学科	120	7	494		ライフデザイン学科	120	7	494	
文学部		3年次			文学部		3年次		
日本文学科	120	7	494		日本文学科	120	7	494	
英語英文学科	120	7	494		英語英文学科	120	7	494	
コミュニケーション文化学科	120	7	494		コミュニケーション文化学科	120	7	494	
社会情報学部		3年次			社会情報学部		3年次		
社会情報学科	100	5	410		社会情報学科	100	5	410	
社会生活情報学専攻					社会生活情報学専攻				
環境情報学専攻	100	5	410		環境情報学専攻	100	5	410	
情報デザイン専攻	100	5	410		情報デザイン専攻	100	5	410	
人間関係学部		3年次			人間関係学部		3年次		
人間関係学科	80	4	328		人間関係学科	80	4	328	
社会学専攻					社会学専攻				
社会・臨床心理学専攻	80	4	328		社会・臨床心理学専攻	80	4	328	
人間福祉学科	100	2	404		人間福祉学科	100	2	404	
比較文化学部		3年次			比較文化学部		3年次		
比較文化学科	165	5	670		比較文化学科	165	5	670	
<b>計</b>					<b>計</b>				
	1575	70	6440			1665	70	6800	
<b>大妻女子大学大学院</b>				→	<b>大妻女子大学大学院</b>				
人間文化研究科					人間文化研究科				
人間生活科学専攻(M)	12	-	24		人間生活科学専攻(M)	12	-	24	
言語文化学専攻(M)	8	-	16		言語文化学専攻(M)	8	-	16	
現代社会研究専攻(M)	6	-	12		現代社会研究専攻(M)	6	-	12	
臨床心理学専攻(M)	6	-	12		臨床心理学専攻(M)	6	-	12	
人間生活科学専攻(D)	3	-	9		人間生活科学専攻(D)	3	-	9	
言語文化学専攻(D)	3	-	9		言語文化学専攻(D)	3	-	9	
<b>計</b>					<b>計</b>				
	38	-	82			38	-	82	
<b>大妻女子大学短期大学部</b>				→	<b>大妻女子大学短期大学部</b>				
家政科	90	-	180		家政科	0	-	0	令和7年度より学生募集停止
家政専攻					家政専攻				
生活総合ビジネス専攻	70	-	140		生活総合ビジネス専攻	0	-	0	令和7年度より学生募集停止
食物栄養専攻	100	-	200		食物栄養専攻	0	-	0	令和7年度より学生募集停止
					家政総合コース	35	-	70	令和7年度よりコースの設置
					食と栄養コース	55	-	110	令和7年度よりコースの設置
<b>計</b>					<b>計</b>				
	260	-	520			90	-	180	

教育課程等の概要																				
(データサイエンス学部データサイエンス学科)																				
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考					
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員以外の教員				
専門教育科目	入門科目	統計・情報系科目群	数理・統計分野科目	線形代数学 I	1前	○	2			○								※演習		
				微積分学 I	1前	○	2			○		1							※演習	
				統計学入門	1後	○	2				○		1							※演習
				線形代数学 II	1後			2			○									※演習
				微積分学 II	1後			2			○		1							※演習
		小計 (5科目)	—	—	6	4	0			—	2	0	1	0	0	0				
		情報分野科目群	情報処理入門	1前	○	2				○		1	1						※演習	
			コンピュータの基礎	1前	○	2					○	2							※演習	
			プログラミング I	1後	○	2				○		1	1						※演習	
			コンピュータシステム	1後			2			○		1								
		小計 (4科目)	—	—	6	2	0			—	3	1	0	0	0	0				
		ビジネス系科目群	野経済分	経済学入門	1後	○	2				○		1							
	小計 (1科目)			—	—	2	0	0			—	1	0	0	0	0	0			
	野経営分		経営学入門	1後	○	2				○		1								
			小計 (1科目)	—	—	2	0	0			—	1	0	0	0	0	0			
	データサイエンス科目	データサイエンス入門	1前	○	2				○		11	2	1					オムニバス		
		実務から学ぶデータサイエンス	1後	○	2				○		1									
		小計 (2科目)	—	—	2	2	0			—	11	2	1	0	0	0				
		演習科目	入門演習 I	1前	○	2					○	5	1							
	入門演習 II		1後	○	2					○	6	1	1							
	小計 (2科目)		—	—	4	0	0			—	11	2	1	0	0	0				
	基礎科目	統計・情報系科目群	数理・統計分野科目	数理統計学	2後	○		2			○		1						※演習	
				回帰分析	2前	○		2			○				1					
				多変量データ解析	2前			2				○								
確率論				2前			2				○			1						※演習
小計 (4科目)				—	—	0	8	0			—	1	0	1	0	0	0			
情報分野科目群		プログラミング II	2前	○		2				○	1	1						※演習		
		ネットワークとセキュリティ	2前	○		2				○	1									
		AI基礎	2前	○		2				○	1							※演習		
		AI・機械学習	2後			2				○	1							※演習		
小計 (4科目)		—	—	0	8	0			—	3	1	0	0	0	0					
ビジネス系科目群		野経済分	ビジネス・エコノミクス	2前	○		2			○		1								
			政策評価	2前	○		2			○		1								
		小計 (2科目)	—	—	0	4	0			—	2	0	0	0	0	0				
		野経営分	経営戦略	2前	○		2				○	1								
			マーケティング	2前	○		2				○	1								
人材開発			2前	○		2				○		1								
小計 (4科目)		—	—	0	8	0			—	2	1	0	0	0	0	1				
データサイ		データサイエンス倫理	2前	○	2					○	1							※演習		
	データハンドリング	2前			2				○							1	※講義			
	調査法	2前			2				○	1										
	小計 (3科目)	—	—	2	4	0			—	2	0	0	0	0	0	1				
演習科目	基礎演習 I	2前	○	2					○	6	1	1								
	基礎演習 II	2後	○	2					○	5	1									
	小計 (2科目)	—	—	4	0	0			—	11	2	1	0	0	0					



基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座	1前		1			○							1	メディア		
		大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ	2前			1		○							1	メディア		
		キャンパスライフとメンタルヘルス	1・2・3・4前・後			2		○							1	メディア		
		女性と健康	1・2・3・4前・後			2		○							4	ホームベース、メディア		
		ジェンダーと社会生活	1・2・3・4前・後			2		○							6	メディア		
		女性史	1・2・3・4前・後			2		○							2	メディア		
		リーダーシップ開発	2・3・4前・後			2				○			1					
	小計 (7科目)	—	—	1	11	0	—	—	—	—	—	0	1	0	0	0	14	
	リテラシー	日本語A (文章表現)	1前・後			2		○									6	
		日本語B (口頭表現)	1・2前・後			2		○									1	
		日本語C (読解)	1前・後			2		○									2	
		データサイエンス・AI概論	1後			2		○				1					メディア	
	小計 (4科目)	—	—	0	8	0	—	—	—	—	1	0	0	0	0	8		
	キャリア	キャリアデザインⅠ	1・2前・後			2		○									6	
		キャリアデザインⅡ	2・3前・後			2		○									2	
キャリアデザインⅢ		3・4前・後			2		○									3		
キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ		1・2・3・4後			2				○							6		
キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ		2・3・4後			2				○							6		
小計 (5科目)	—	—	0	10	0	—	—	—	—	0	0	0	0	0	11			
全学共通科目	人間と文化	文学の世界	1・2・3・4前・後			2		○								5	メディア	
		音楽の世界	1・2・3・4前・後			2		○								4		
		美術の世界	1・2・3・4前・後			2		○								3		
		映像・演劇の世界	1・2・3・4前・後			2		○								6		
		考古学の世界	1・2・3・4前・後			2		○								1	メディア	
		ポピュラー・カルチャーの世界	1・2・3・4前・後			2		○								4		
		地域と文化	1・2・3・4前・後			2		○								7	メディア	
		言語と文化	1・2・3・4前・後			2		○								3	メディア	
		日本の歴史と文化	1・2・3・4前・後			2		○								3	メディア	
		世界の歴史と文化	1・2・3・4前・後			2		○								1	メディア	
		哲学と思想	1・2・3・4前・後			2		○								3	メディア	
		日本文化・事情	1・2・3・4前・後			2		○								1	メディア	
	小計 (12科目)	—	—	0	24	0	—	—	—	—	0	0	0	0	0	35		
	社会と生活	子どもの世界	1・2・3・4前・後			2		○									3	メディア
		人間の成長と心理	1・2・3・4前・後			2		○									2	メディア
日本国憲法		1・2・3・4前・後			2		○									2	メディア	
法律と現代社会		1・2・3・4前・後			2		○									2	メディア	
政治と現代社会		1・2・3・4前・後			2		○									2	メディア	
経済と現代社会		1・2・3・4前・後			2		○									3	メディア	
メディアと現代社会		1・2・3・4前・後			2		○									4		
家族と現代社会		1・2・3・4前・後			2		○									1	メディア	
福祉と現代社会 (ボランティアを含む)		1・2・3・4前・後			2		○									1	メディア	
SDGsと現代社会		1・2・3・4後			2		○									1	メディア	
小計 (10科目)	—	—	0	20	0	—	—	—	—	0	0	0	0	0	21			
自然と科学	数学の世界	1・2・3・4前・後			2		○									1	メディア	
	生活の物理	1・2・3・4前・後			2		○									1	メディア	
	生活の化学	1・2・3・4前・後			2		○									2	メディア	
	科学と環境	1・2・3・4前・後			2		○									2	メディア	
	生命の科学	1・2・3・4前・後			2		○									1	メディア	
	宇宙の科学	1・2・3・4前・後			2		○									1	メディア	
	人類の進化	1・2・3・4前・後			2		○									1	メディア	
	自然科学の歴史	1・2・3・4前・後			2		○									1	メディア	
小計 (8科目)	—	—	0	16	0	—	—	—	—	0	0	0	0	0	7			
スポーツ	スポーツA	1・2・3・4前・後			1					○						6		
	スポーツB	1・2・3・4前・後			1					○						2		
	スポーツC	1・2・3・4前・後			1					○						3		
	スポーツD	1・2・3・4前・後			1					○						2		
	シーズン・スポーツ	1・2・3・4後			1					○						1		
	スポーツと健康	1・2・3・4前・後			2		○									2	メディア	
	レクリエーション論	1・2・3・4前・後			2		○									2	メディア	
	レクリエーション実技	1・2・3・4前・後			1					○						2		
小計 (8科目)	—	—	0	10	0	—	—	—	—	0	0	0	0	0	12			
殊講義特	教養特殊講義	1・2・3・4前・後			2		○									1		
	小計 (1科目)	—	—	0	2	0	—	—	—	—	0	0	0	0	0	1		



博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論	2前・後				2	○									1	
	博物館概論	2前				2	○									1	
	博物館経営論	2・3・4前				2	○									1	
	博物館資料論	2・3・4前				2	○									1	
	博物館資料保存論	2・3・4前				2	○									1	
	博物館展示論	2・3・4後				2	○									1	
	博物館情報・メディア論	2・3・4前				2	○									1	
	博物館教育論	2後				2	○									1	
	博物館実習	3・4通				3			○								2
	文化史A	2・3・4前				2	○										1
	文化史B	2・3・4後				2	○										1
	美術史A	2・3・4前				2	○										1
	美術史B	2・3・4後				2	○										1
	民俗学A	2・3・4前				2	○										1
	民俗学B	2・3・4後				2	○										1
小計 (15科目)	—	—	0	0	31	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0	10	
図書館司書に関する科目	生涯学習概論	2前・後				2	○									1	
	図書館概論	2前				2	○									1	
	図書館情報技術論	3後				2	○									1	
	図書館制度・経営論	2後				2	○									1	
	図書館サービス概論	2後				2	○									1	
	情報サービス論	3前				2	○									1	
	児童サービス論	3後				2	○									1	
	情報サービス演習 (1)	3前・後				1		○									1
	情報サービス演習 (2)	4前				1		○									1
	図書館情報資源概論	2後				2	○										1
	情報資源組織論	3前・後				2	○										1
	情報資源組織演習	4通				2		○									1
	図書・図書館史	3・4前				1	○										1
	図書館サービス特論 (2)	3・4前				1	○										1
	図書館情報資源特論 (2)	3・4後				1	○										1
図書館基礎特論	3・4後				1	○										1	
小計 (16科目)	—	—	0	0	26	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0	9	
合計 (213科目)	—	—	45	273	57	—	—	—	11	2	1	0	0	0	0	142	

※演習

※演習

学位又は称号	学士（データサイエンス）	学位又は学科の分野	工学関係、経済学関係
卒業・修了要件及び履修方法		授業期間等	
卒業要件単位 全学共通科目 30単位以上 専門教育科目 94単位以上 合計124単位以上修得すること。 詳細は以下のとおりである。		1学年の学期区分	2期
		1学期の授業期間	15週
		1時限の授業の標準時間	90分
本学は必修、選択のほか、選択科目の中で特に重要となる授業科目を選択必修としている。 ○全学共通科目 ・必修単位（5単位） 基礎科目から「大妻教養講座」を1単位、外国語科目から「英語ⅠA」「英語ⅠB」「英語ⅠC」「英語ⅠD」を各1単位。 ・選択必修単位（12単位以上） 基礎科目女性とキャンパスライフの「大妻教養講座」「大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ」以外の2単位以上、キャリアから2単位以上。 教養科目人間と文化、社会と生活、自然と科学、スポーツから8単位以上。 なお、リテラシーは選択必修科目の単位数には含まない。 ・選択単位（13単位以上） 基礎科目、教養科目、外国語科目、地域文化・国際理解科目の中から、必修科目と選択必修科目で履修した科目以外に13単位以上。 ○専門教育科目 ・必修単位（40単位） 入門科目 統計・情報系科目群数理・統計分野科目「線形代数学Ⅰ」「微積分Ⅰ」「統計学入門」各2単位、 統計・情報系科目群情報分野科目「情報処理入門」「コンピュータの基礎」「プログラミングⅠ」各2単位、 ビジネス系科目群経済分野科目「経済学入門」2単位、 ビジネス系科目群経営分野科目「経営学入門」2単位、 データサイエンス科目「データサイエンス入門」2単位、 演習科目「入門演習Ⅰ」、「入門演習Ⅱ」各2単位、小計22単位 基礎科目 データサイエンス科目「データサイエンス倫理」2単位、 演習科目「基礎演習Ⅰ」「基礎演習Ⅱ」各2単位、小計6単位 発展科目 演習科目「専門演習Ⅰ」「専門演習Ⅱ」「専門演習Ⅲ」「専門演習Ⅳ」各2単位、及び「卒業研究」4単位、小計12単位 なお、「専門演習Ⅰ、専門演習Ⅱ」は全学共通科目及び専門教育科目で合計50単位以上修得し、かつ、第1年次までの専門教育科目の必修単位をすべて修得していることを履修の条件とする。 ・選択必修単位（10単位以上） 統計・情報系科目群数理・統計分野科目「数理統計学」、「回帰分析」から2単位以上、 統計・情報系科目群情報分野科目「プログラミングⅡ」、「ネットワークとセキュリティ」、「AI基礎」から2単位以上、 ビジネス系科目群「ビジネス・エコノミクス」、「政策評価」、「経営戦略」、「マーケティング」、「人材開発」から4単位以上、 データサイエンス科目「実務から学ぶデータサイエンス」、「協働連携プロジェクトA」、「協働連携プロジェクトB」から2単位以上。 ・選択単位（44単位以上） 専門教育科目の選択科目から44単位以上 なお選択必修科目で卒業要件単位数を超えて修得した単位数は、選択単位に含むことができる。 ○履修科目の登録の上限（年間） 1学年44単位、2学年48単位、3学年48単位、4学年46単位			

授 業 科 目 の 概 要				
(データサイエンス学部データサイエンス学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 入門科目 統計・情報系科目群 数理・統計分野科目	線形代数学Ⅰ	○	機械学習や統計的な手法に関する文献を取り入れようとした際、用いるデータが高次元の場合や単純なアルゴリズムのままでは計算時間が長い問題を解決するため、計算時間の短縮のために行列を用いる場面が多く存在する。本講義では、今後、新しい文献や新しい領域の既存手法を理解する際に直面する行列計算を、正しく読み取り、理解し、応用していくことができるようにするために、線形代数の基本的な内容を理解する必要がある。 この授業では、高校での履修の有無に囚われず、基本的な講義をしていく。その際、座学だけとせず、都度、演習課題を手計算や場合によっては計算機を用いて計算を実践する。これにより、計算手法をそのまま学ぶのではなく、実応用を見据えた手段として行列を利用していることを念頭に学習を進めることをねらいとする。	主要授業科目 講義：20時間 演習：10時間
	微積分学Ⅰ	○	微積分学は、データサイエンスの基礎のひとつである。微分が示す数学的意味を利用することで、統計モデルの最適化や、経済モデルの傾向などを理解することができるようになる。また、積分は、確率、期待値、分散導出など、統計学や確率論の基本的な理解につながる。 本講義では、微積分学の基礎とデータサイエンスのつながりについて理解した上で、数式の意味を理解し、1変数関数に対して、適切に解を導出できることを目指していく。	主要授業科目 講義：18時間 演習：12時間
	統計学入門	○	推測統計学の入門講義。高校1、2年レベルの数学的な予備知識をもとに、統計検定2級レベルの推測統計学の習得を目指す。具体的には、以下の事項について理解することが目標となる。1) 推測統計学の基本概念（平均、分散、母集団、標本、自由度、正規分布、t分布）、2) 統計的仮説検定と信頼区間の考え方（仮説、棄却、二種類の過誤、P値、信頼区間、信頼係数）、3) 母平均に関する検定（対応のある・なしの検定、一元配置分散分析、多重比較）、4) 二つの変量の関係（相関分析、単回帰分析）。	主要授業科目
	線形代数学Ⅱ		機械学習や統計的な手法に関する文献を取り入れようとした際、用いるデータが高次元の場合や単純なアルゴリズムのままでは計算時間が長い問題を解決するため、計算時間の短縮のために行列を用いる場面が多く存在する。本講義では、今後、新しい文献や新しい領域の既存手法を理解する際に直面する行列計算を、正しく読み取り、理解し、応用していくことができるようにするために、線形代数の基本的な内容を理解する必要がある。 この授業では、線形代数学Ⅰと同様に、講義での座学だけに留まらず、都度、演習課題を実施することで実応用を見据えた手段として行列を利用していることを念頭に学習を進めることをねらいとする。線形代数学Ⅰでは概念的な内容であったが、線形代数学Ⅱでは、数理的な内容となるため、他の講義で学ぶ、様々な分析法を数理的に理解できるようになり、分析法を用いる際の理解に繋がることをねらいとする。	講義：20時間 演習：10時間
	微積分学Ⅱ		微積分学は、変化する事象を調べる手段として用いられることから、データサイエンスにおける多様な現象を精密に記述し、解析するための重要な基礎の一つである。 微積分学Ⅰで培った基礎を元に、関数列と微分積分との関係を計算に活用できるようにする。特に、本講義では、極限、偏微分や重積分など多変数関数についての微積分学を扱う。多変数関数を用いる際には、その概念を図形的に理解することが求められる。それらの理解のために、図形を通じて、直観的に理解ができることを目指す。データサイエンス技法への微積分学の適用が可能となることを目標とする。	講義：18時間 演習：12時間

専門教育科目	入門科目	統計・情報系科目群	情報分野科目	情報処理入門	○	この授業は、データ分析をするために必要となるPC操作やプログラミングの基礎を習得する。仮想化技術やコンテナ技術を学習することにより、プログラミング環境を構築する方法を習得する。さらに、インターネットの主干技術であるHTML、CSS、JavaScriptの基礎を学び、データ分析に適した分析環境を構築できるようになることを目指す。 この授業で扱う内容は情報処理の基礎であり、1年後期以降の専門的な内容をスムーズに理解できるようになることを狙いとしている。	主要授業科目 講義：15時間 演習：15時間
				コンピュータの基礎	○	この授業は、情報処理の基本概念と実践的なスキルを習得するための入門的な科目である。コンピュータのハードウェアとソフトウェアの基本的な理解や、ネットワーク、セキュリティなどの基本的な知識の習得、また文書作成、テーブル作成、データ入力、基本的な計算、グラフ作成、プレゼンテーション作成といった、コンピュータを活用するための基本的なスキルについて習得する。学生生活のみならず、就職活動、社会人生活にて活用できるリテラシーの向上を狙いとする。	主要授業科目
				プログラミング I	○	この授業は、プログラミングの基本概念を理解し、Pythonプログラミング言語を使用してプログラムを作成するための基本的なスキルを習得する。プログラミングが初めての学生でも、Pythonの直感的な構文を通じてプログラミングの基本を身につけることができる。具体的には、変数、データ型、制御構造、関数、モジュール、オブジェクト指向プログラミング、ファイル操作、例外処理などのPythonの基本構成要素を学ぶ。また、データの可視化の方法についても学ぶ。これにより、分析を行うデータおよび分析手法に適したプログラムを実装できる能力の基礎を育成する。	主要授業科目 講義：15時間 演習：15時間
				コンピュータシステム		コンピュータの構成・コンピュータの仕組みをコンピュータ科学が歩んだ歴史を振り返り、現代のコンピュータ構成を学ぶ。CPU内部で行われている、「メモリからプログラムコード（機械語列）を読み、機械語を解釈し、メモリからデータを読み演算して結果をメモリに書き込む」、といった一連の処理機構を学ぶ。また、どのような仕組みで物理メモリ容量以上のメモリ容量を利用するアプリケーションが実行されているのか、キーボード、ディスプレイ、USBメモリやWifiなどの機器がどのように制御されているか、などを学ぶ。さらに、プログラミングに欠かせない代表的なアルゴリズムおよびデータ構造の概要、そしてデータを蓄積・検索するデータベースシステムの概要を学ぶ。	
	ビジネス系科目群	経済分野科目	経済学入門	○	経済学は、おカネの問題に限らず広く人間の合理的な選択について分析する科学である。経済に関わる変数は数字で測れることが多いため、経済学ではデータを用いた計量分析が古くから発達してきた。しかし、実験室で条件をコントロールした実験を行うことが難しいため、理論も用いないと意味のある分析ができないことが多い。そこで、ミクロの個人の選択から始まり、企業の行動、消費者と生産者の取引、マクロの国全体の経済について順番に学んでいく。論理がクリアになるよう必要最小限の数式は用いつつ、なるべく言葉で考え方を説明することによって、経済学独自の発想法にふれることを重視する。経済分野の他の科目を履修する前提となるだけでなく、社会人となっても経済を語る上で必須の常識となる経済学の基本概念を正確に理解することを目指す。	主要授業科目	
			経営分野科目	経営学入門	○	経営現象を考察対象とする経営学では、様々なトピックに対して多様なアプローチで研究が行われている。経営学の導入講義として、本講義では営利企業を中心に、企業を取り巻く「利害関係者（ステークホルダー）」に関する議論を概括する。企業については、人の集団としての組織という側面から経営組織論の主要理論と、顧客を巡ってライバルと競争するという側面から経営戦略論の主要理論について検討する。企業を取り巻くステークホルダーについては、資本提供者（資本市場）、企業で働く個人（労働市場）、企業が属する社会（企業の社会的責任）との関係を議論する。これらの基礎的な理論・コンセプト・分析ツールを理解・習得し、実際の経営現象を自ら分析する能力を養うことが本講義の目的である。	主要授業科目

専門教育科目	入門科目	データサイエンス科目	データサイエンス入門	<p>データサイエンスを学び始めるデータサイエンス学部新入生向けに、データサイエンスとは何か、データサイエンスを学ぶ意義は何か、本学部でデータサイエンスの何をどう学ぶか、データサイエンスは他の分野の学問とどう異なりどう関係するのか、データサイエンスはビジネスでどう応用されているかなどについて、多角的・多面的に理解することを目指す。また、これから専門とするデータサイエンスの学びへのいざないとなる科目として、データサイエンスで個々の学生が自分が興味を持つテーマをみつけるきっかけとなることを期待する。統計、情報、経済、経営と専門分野が多岐にわたる教員が、それぞれの専門とするテーマや関連するトピックスを取り上げるオムニバス形式の講義として開講する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)  (1 富浦英一/2回)  オリエンテーション、データサイエンスと経済学：国際経済の例(経済分析にとつてのデータ、経済のデータ分析にとつての経済学)  (2 椎名洋/1回)  統計学は、長い歴史を持つ学問で、データサイエンスを支える重要な柱の一つである。確率的なモデルを厳密に定義して、実際のデータと比較して、様々な推論を行うという方法は、どんなデータ分析においても一番基本となる方法である。新たなAIの時代に、統計学的手法がどのように使われているか、そして使われるべきかを概観する  (5 小野陽子/1回)  データサイエンスに関する技術と、技術を社会展開する上での倫理的問題について  (6 塩崎潤一/1回)  データサイエンスが変えるビジネスー相関ではなく因果を推定することでビジネスが変わるー  (14 田島友祐/1回)  健康とは何か?～身近な健康サービスや健康器具からみるデータサイエンス～  (4 石川裕/1回)  スーパーコンピュータとシミュレーション、情報セキュリティ  (10 広瀬啓雄/1回)  行動的な人、すぐにあきらめてしまう人、なかなか決まらない人などいろいろな特性があるが、これを数値化する指標ACS-90の紹介とコンピュータシステム設計時の応用事例について紹介する  (11 本田新九郎/1回)  まちとヒトのICTとデータサイエンスーウェルビーイングの実現にむけたサービス開発と社会実装～  (12 尾崎剛/1回)  教育工学の基本から始め、教育データ分析の重要性とその応用に焦点を当てる。  (7 鶴光太郎/1回)  為替レートに焦点を当てることで経済学やデータ分析への興味を持たせる  (8 永瀬伸子/1回)  男女の賃金差について、様々な統計から何が言えるかを考える  (3 網倉久永/1回)  データ分析に基づく経営意思決定：データサイエンスと経営学  (9 野澤智行/1回)  データサイエンス的観点で捉えた、キャラクターに関する消費行動とマーケティング活用事例  (13 高崎美佐/1回)  人に関わる数値を経営に活かす：企業経営における人に関わる数値を取り上げ、企業経営への活用可能性について考える</p>	主要授業科目 オムニバス方式
			実務から学ぶデータサイエンス	<p>本講義は、種々の業種の企業、官公庁、地方自治体がいかにデータを収集、整理、分析、活用しているのかについて、担当者から学ぶことを目指している。社会の抱える課題の設定や解決においてデータがいかに活用されているのかを学ぶことを通じて、データサイエンスの学びを身近なものとする。企業などの外部講師の講義を踏まえ、学生とのディスカッションの場も作る。実務経験者である本学の基幹教員をファシリテーターとして配置し、外部の講師と学生との交流の機会を創出する。企業などとの連携を教育に取り入れる授業である。</p>	主要授業科目

入門科目	演習科目	入門演習Ⅰ	○	「入門演習Ⅰ」では、分野を問わず大学生として求められるアカデミック・スキルの修得のきっかけになることを少人数クラスで目指す。特に、科学的な検証に向けた課題設定の仕方、原典にも当たって真偽を確かめつつ進める文献や統計資料の調べ方、文献資料の批判的な読み込み、引用などにも注意したレポートの書き方、内容が正確に伝わるわかりやすい発表の仕方、相互に学びを深めるディスカッションの仕方などについて、具体的な事例に沿った作業を体験して実践的に学ぶ。グループワークの形式で取り進め、社会が抱える課題への関心も醸成しつつ成果の発表につなげる。次学期に開講されるデータを扱うスキルを学ぶ「入門演習Ⅱ」に接続する演習科目という位置付けである。	主要授業科目		
		入門演習Ⅱ	○	前期の「入門演習Ⅰ」において分野を問わず大学生として求められるアカデミック・スキルに少人数クラスでふれた後に履修する演習科目として、実践的・応用的な色彩の強い学問であるデータサイエンスを専門的に学ぶ入門として、データサイエンスに求められるデータを扱うスキルを少人数クラスで体験する。特に、EXCELなどを用いて、実際のデータにふれて、データの分析にかかる前にデータの収集・整理が必要となること、分析に当たって検証する仮説の設定が重要であること、社会の課題を見出し解決するには分析結果を解釈し解決策などの提案に至る必要があることなどを、一連の作業を体験して実践的に学ぶ。グループワークの形式で取り進め、成果の発表につなげる。1年から4年まで切れ目なく提供される演習科目の一環として次学期に開講される「基礎演習Ⅰ、Ⅱ」に接続する演習科目という位置付けである。	主要授業科目		
専門教育科目	基礎科目	統計・情報系科目群	数理・統計分野科目	数理統計学	○	「統計学入門」で勉強した事柄を、数理的により厳密な扱いをしながら復習し、そこでは学習しなかったより高度な概念について理解する。統計検定2級レベルの数理的な問題を、自分の力で解けるようになることを目標とする。以下の項目ごとに、理論・知識の確認と補充をした後に、実際に問題を解く。自分の担当問題の解答を受講者全員に対し発表説明する。確率、確率分布、2項分布とポアソン分布、正規分布、無作為抽出と標本分布、推定、検定、カイ二乗検定、相関と回帰。	主要授業科目
				回帰分析	○	統計的な分析において結果と要因となる関係を明らかにすることが可能な回帰分析は、様々な分野で用いられる方法である。特に因果関係の推定、予測が可能であるため、解釈性のしやすさもあり、実用的である。 この授業では、フリー統計ソフトRを使い、数理的な理解だけでなく、分析方法について学び、結果を解釈できるようにする。レポートとしてそれらの分析過程ならびに結果をまとめることで他者へ説明する能力を身に付けることをねらいとする。	主要授業科目 講義：20時間 演習：10時間
				多変量データ解析		多変量のデータを主として記述統計の視点から学ぶ。座学による理論的な理解と同時に、RのプログラムをPC上で動かして、実際のデータを用いて多変量分析が行えるようになるための演習も行う。理論とプログラムと実践の3回をワンセットにして、以下の事項に関して学ぶ。1) 判別分析、2) サポートベクターマシン、3) クラスタ分析、4) 主成分分析、5) 因子分析。これらの事項を理解するために必要な行列の基礎知識も、復習しながら勉強を進める。	
				確率論		降水確率など、何かを予測するときには「%」として確率が用いられる。主に推測統計を学ぶ上で重要となる確率変数と確率分布の考え方、ならびに、それらの平均や分散の求め方について適切に計算することが必要となる。 この授業では、基本的な講義と演習課題を通して、基本的な確率の考え方、起こりうる事象の数を数え上げることによる確率計算の方法や様々な場面で考えられる確率（分布）について学ぶ。計算が難解となる場合は、計算機を適宜利用し、適切に確率を導出できるようにすることをねらいとする。	講義：20時間 演習：10時間

専門教育科目	基礎科目	統計・情報系科目群	情報分野科目	プログラミングⅡ	○	<p>情報処理入門 (HTML/CSS、JavaScript) およびプログラミングⅠ (Pythonの基礎) を修得していることを前提として、ビッグデータを収集、保存、加工する方法を学び、統計的処理や機械学習、AIで分析可能なデータ形式に整え、データの見える化により特徴量エンジニアリングまでをプログラミング言語Pythonで実装するスキルと知識を育成することを目的とする。取り扱うデータは、CSV形式だけでなく、Webからクローリング、データベースからSQLで検索など、インターネットなどから収集する多様なデータも対象とする。実践的なデータにより前処理した結果をシンプルな機械学習モデルに実装し、結果の評価をグループ単位で実習する。</p>	<p>主要授業科目 講義：15時間 演習：15時間</p>
				ネットワークとセキュリティ	○	<p>ISO (国際標準化機構) が規定したOSI参照モデルで定義されたプロトコル階層の考え方を学び、実際に使われているTCP/IP、UDP/IPおよびその上で実現されているSMTPやHTTPなどのプロトコルを学ぶ。また、現代の情報システムに対するサイバー攻撃を概観し、情報セキュリティ7要素(機密性、完全性、可用性、真正性、責任追跡性、否認防止、信頼性)に対する基盤技術である、暗号、認証基盤、電子署名や、WEBサイトとの通信で使われるSSL技術、仮想ネットワーク技術であるVPNなどの基盤技術を学ぶ。</p>	<p>主要授業科目</p>
				AI基礎	○	<p>AI (人工知能) の定義、AIの歴史、画像認識・自然言語処理・ゲームなどの応用事例を学ぶとともに、ビッグデータ収集のためのIoT技術や、データ分析のための技術として機械学習・ディープラーニングの基礎を習得する。また近年急速に進歩している生成AIについて、基本的な概念について学ぶとともに、画像生成、自然言語生成などの実用的な応用が業務の効率化や新たな付加価値の創造が可能なることを理解し、実践を通じてAIを活用するスキルを身に付けることを狙いとする。またAIの倫理的・社会的な側面についての課題にも触れる。</p>	<p>主要授業科目 講義：15時間 演習：15時間</p>
				AI・機械学習		<p>情報処理入門 (HTML/CSS、Javascript)、プログラミングⅠ (Pythonの基礎)、プログラミングⅡ (Pythonでビッグデータ処理) を修得していることを前提として、AI・機械学習の基本的な概念とアルゴリズム、モデリング、分析結果の評価方法、その応用について学習する。授業内で取り扱うトピックは、おもにScikit-Learnモジュールに実装されている、データ前処理、教師あり学習、教師なし学習、ニューラルネットワーク、結果の評価方法など多岐にわたり、機械学習アルゴリズムの背後にある理論と数学的な基礎を理解するだけでなく、実際のデータでPythonプログラミングの実装と結果の評価ができる知識とスキルを育成することを目的としている。</p>	<p>講義：15時間 演習：15時間</p>
		ビジネス系科目群	経済分野科目	ビジネス・エコノミクス	○	<p>ビジネスの現場で経済学をどのように役立てることができるかを学ぶのがビジネス・エコノミクスの目的である。どのような市場に参入し、どのような商品をいくつ作り、どのような価格で売るかは経営者や従業員が考えるべき最も重要な企業戦略となる。この授業では、数値例を使った計算などにも習熟しながら、経営者が直面するビジネス課題に対する基本的なマイクロ経済学の援用の仕方を学んでいく。具体的には、自社が売れる製品の需要はどのような要因で決まるか、また、その生産に当たってはどうかすれば費用が最小化できるか、また、利益を最大化するために価格や生産量はどうか設定すべきかなどである。さらに、こうした企業戦略は企業が直面する市場の構造や競争環境の違いなどでどうか変化するか、また、多様な価格設定をして更に収益を高めるやり方を学ぶ。課題や小テストなどで授業内容の確実な定着を目指す。なお、「経済学入門」を既に履修済であることを前提とする。</p>	<p>主要授業科目</p>

専門教育科目 基礎科目 経営分野科目 データサイエンス科目	ビジネス系科目群	経済分野科目	政策評価	○	<p>政策評価・プログラム評価とは何か、Evidence Based Policyが求められる理由、その際にデータサイエンスの手法を用いることがなぜ重要なかを学ぶ。2変数を比較した場合に、無関係であっても両データが同じような動きをしていれば相関があるように見えること、また相関関係と因果関係は異なること、その事例を入門的に学ぶ。例① 大学教育と生産性の関係 相関関係か、因果関係か。例② 理系の実験 薬剤の効果 プラセボと試験 例③ 非正規雇用でもすぐに仕事に就いた方が将来キャリアは良いのか仕事を選んだ方が良いのか ランダム実験 例④ 子どもの発達と保育園、母親のケアの評価 例⑤ 社会科学ではなぜ自然実験を利用せざるを得ないのか 以上のような例を通じて、科学的な政策評価、プログラム評価の重要性について学ぶ。</p>	主要授業科目
		経営戦略	○	<p>企業の対外活動の中核をなす経営戦略論の基礎的な理論を、競争戦略・全社戦略の策定と遂行プロセスを中心に議論する。競争戦略については、競争優位の構築と維持という観点から競争戦略理論を整理し、マーケティング戦略・コスト戦略・競争ポジション・製品ライフサイクルなどについて取り上げる。全社戦略については、事業構造の決定と資源展開という観点から議論を整理し、事業多角化・垂直統合・企業ドメイン・業界構造の分析・製品ポートフォリオマネジメントなどについて議論する。経営戦略に関わる基本的な理論・コンセプト、分析ツールを理解し、それらを活用して、現実の社会現象を分析する能力を向上させることが、本講義の目的である。</p>	主要授業科目	
		マーケティング	○	<p>マーケティングとは「企業および他の組織がグローバルな視野に立ち、顧客との相互理解を得ながら、公正な競争を通じて行う市場創造のための総合的活動」のことである。インターネットや情報機器・技術の発達により、消費者ニーズと購買意思決定が多様化・複雑化した今日、企業だけでなく官公庁や非営利組織でもマーケティングの発想が重要になっている。 本講義では、広告会社およびマーケティングリサーチ会社の勤務経験を有する教員が、現代の企業や団体に必須のマーケティングについて、どのような戦略をどんな時に活用すべきか、幾つかの具体事例を用いて体系的に指導し、実践能力を養成していく。</p>	主要授業科目	
		人材開発	○	<p>この授業の目的は、組織がもつ資本のひとつと言われる「人」の活用について学ぶことである。組織は「人」が持つ力を最大限に活かすことによって、その目的を達成し社会に貢献することができる。 授業では、組織で働く人に必要な知識とスキルについて理解を深め、組織が人材をどのように活用しているかに関する知識を獲得する。さらに、人材開発が求められる背景を知り、組織における人材開発の役割について学ぶ。人材開発の主要な内容のひとつである研修をデザインし、プレゼンテーションを行う。</p>	主要授業科目	
		ビジネス英語		<p>これまでの英語クラスで学んだことを活かし、よりフォーマルな場面で自信を持って英語を使えるようになることを目標とする。特にビジネスの場面や、海外でフィールドワークを実施するような場合に、相手に対して丁寧かつ明確に情報を伝え、交渉し、合意に達するというプロセスを繰り返し練習し、実用的な英語を身につける。また、対面だけではなく文書によるコミュニケーション（Emailやショートメッセージなど）の方法も学び、時間や場所を問わずスムーズに意思疎通を図れる技術を習得する。学期の終盤には組織や商品を紹介するプレゼンテーションを実施し、より高度なプレゼンテーションスキルを磨く。</p>	主要授業科目	
		データサイエンス倫理	○	<p>データサイエンス領域の様々な活動に携わるひとを、「データサイエンス人材」という。データサイエンス人材は、数学・統計学や計算機科学、AIといったデータサイエンス技術の基盤となる知識を有するだけでなく、未来へのビジョンを持つことが求められる。ビジョンを構築する上では、「データ思考」を日々発生し蓄積されている膨大なデータと向き合い、データから新たなストーリーを紡ぎ、新しい価値を社会に提案した上で実装することが必要である。 本講義では、データサイエンス技術の変化に伴う諸問題を倫理という観点から検討し、なぜデータサイエンスに倫理が必要なのかを考えていく。</p>	主要授業科目 講義：17時間 演習：13時間	

専門教育科目	基礎科目	データサイエンス科目	データハンドリング		<p>データから価値を創出するためのプロセスとして、ビジネス課題の理解、データの理解、データの準備、分析モデル作成、モデルの評価、意思決定者への報告/展開が必要である。本講義では、このプロセスから「データの理解」「データの準備」に焦点を当て、必要な知識・スキルの習得を目指す。本講義を通じ、データ駆動型社会において不可欠なデータリテラシー・データハンドリングの基本原則、データ理解のための可視化を身に付け、共同研究やインターンなど実際のデータを用いる場面で活躍できる人材の育成を行う。前半はデータハンドリングのスキルを一通り習得し、後半では実際に公開されているデータを用いたデータハンドリング演習を行う。扱う言語はPythonとし、Pandas/Numpy等のパッケージを用いる。</p>	講義：12時間 演習：18時間		
			調査法		<p>社会調査、市場調査などの方法論を体系的に学び、データサイエンスを実践する際の基礎となるデータの収集方法を身につけることを目的とする。データサイエンスの方法論を学ぶ前に、データ収集の課題などを理解できるようにする。課題に対して、調査仮説のたて方を学び、適切な調査方法の選定、調査の企画・実施まで、実践的に調査することができる能力の習得を目指す。データサイエンスで重要な定量調査を中心に解説し、定性調査の方法論などについても学べるようにする。具体的な調査の事例をもとに、調査の企画から実践までを学ぶ。</p>			
		演習科目	基礎演習Ⅰ	○	<p>先学期に開講された「入門演習Ⅱ」において、データサイエンスを専門的に学ぶ入門としてデータサイエンスに求められるデータを扱うスキルを少人数クラスで体験した後に履修する演習科目として、専門として学ぶデータサイエンスの基礎レベルとして、データの収集・整理・分析・活用の一連の流れを少人数クラスで実際のデータを用いて自分で取り組んでみる。特に、基礎レベルの講義で学んだ統計学の分析手法や情報スキルを実際のデータに用いてみることに重点を置く。グループワークの形式で取り進め、成果の発表につなげる。次学期に開講される「基礎演習Ⅱ」に接続する演習科目という位置付けである。</p>	主要授業科目		
			基礎演習Ⅱ	○	<p>先学期に開講された「基礎演習Ⅰ」において、専門として学ぶデータサイエンスの基礎レベルとしてデータの収集・整理・分析・活用の一連の流れを統計・情報スキルに重点を置いて少人数クラスで体験した後に履修する演習科目として、データサイエンスのビジネスへの応用について、社会やビジネスが抱える課題を見出す能力が鍛えられるよう経済学・経営学の基礎的知識を用いつつ少人数クラスで実際のデータを用いて体験してみる。グループワークの形式で取り進め、成果の発表につなげる。次学期に開講される「専門演習Ⅰ」に接続する演習科目という位置付けである。</p>	主要授業科目		
		発展科目	統計・情報系科目群	数理・統計分野科目	因果推論		<p>因果推論についての基本を学ぶ。以下の事柄について理論を学ぶと同時に、実際にパソコンでプログラム（R言語）を動かしながら学習する。1) 因果に関する基本的な考え方（相関と因果、潜在的結果変数、無作為割付、条件付き独立等）、2) 回帰分析による因果推論（重回帰の復習、回帰分析の前提条件のチェックと逸脱への対処）、3) 傾向スコア（ロジスティック回帰、マッチング、層別、重みづけ）、4) 操作変数法、5) 回帰不連続デザイン（基礎と応用）。</p>	
					ベイズ統計学		<p>ベイズ統計学の初歩を学び、ベイズモデルのプログラム（PyMC3）を実際に動かして分析できるようになることを目的とする。以下の事項について学ぶ。1) ベイズの定理とベイズ推定、2) 具体的な確率分布への適用、3) 事後分布の推定（共益事前分布、PyMC3の使い方）、4) MCMC（原理、乱数発生、診断）、5) 線形モデル（正規モデル、ロバスト回帰、多項式回帰）、6) 一般化線形モデル（GLMの理論、ロジスティック回帰、ポアソン回帰）。</p>	

専門教育科目 発展科目 統計・情報系科目群	数理・統計分野科目	時系列分析	<p>近年、IoTの発展により、多種多様な時系列データを計測することが可能となっている。それらのデータを活用するために統計学の分野では統計的時系列解析が発展している。扱うデータの背景により、時系列分析の難しさは異なるが、分析手法により分析ができることは、今後重要性を増していく。</p> <p>この授業では、フリー統計ソフトRを使い、離散時間 (discrete time) の状態空間モデル (state space modeling) と状態フィルタリング法 (state filtering) に取り組む。分析方法について学び、Rを用いて分析をし、それを解釈できるようにする。レポートとしてそれらの分析過程ならびに結果をまとめることで他者へ説明する能力を身に付けることをねらいとする。</p>	講義：20時間 演習：10時間
		数理モデリング	<p>実社会に存在する様々な問題や事象に対して、次のアクションを起こすための意思決定や無駄を削減する最適化などをしていく際、数理的なモデリングが必要不可欠である。近年では、感染症対策のため、人の動きや感染率のモデリングと我々の視点から見るとマクロな視点やミクロな視点でも検討されており、重要性は高い。</p> <p>この授業では、様々な数理モデルについて学ぶとともに、任意のプログラミング言語を用いてそれらを実装し、シミュレーションまで取り組むことで数理モデリングの重要性を学び、興味関心のある分野へ応用していくことをねらいとする。具体的には、中間と最終演習の2回の演習を通して、講義で学んだ各手法を実際のデータで動かすことで理解を深めることをねらいとする。</p>	講義：20時間 演習：10時間
		Webプログラミング	<p>情報処理入門 (HTML/CSS、 JavaScript)、プログラミング I (Pythonの基礎)、プログラミング II (Pythonでビッグデータ処理)、AI・機械学習 (AIと機械学習の基礎知識) を修得していることを前提として、Webアプリケーション構築の基本的な概念とアルゴリズム、その応用について学習する。授業内で取り扱うトピックは、Webクロールや外部データベースなどインターネットを経由して集められる多様なデータを加工、データベースに格納、Webアプリケーションでだれでも容易に分析できる仕組みと、分析結果をWebページとして体裁よく表示する方法について学ぶ。現在のアプリの多くは、Webアプリとなっていることが多く、システム構築に必要な幅広い知識を習得する。</p>	講義：15時間 演習：15時間
		深層学習	<p>この授業は、データサイエンスの理論と技術を効果的に学び、実世界で適用できるスキルを身につけることを目的としている。授業では、深層学習の基礎理論から始め、より高度なテクニックとしてCNN (畳み込みニューラルネットワーク)、RNN (再帰型ニューラルネットワーク)、転移学習、そして強化学習に至るまで広範なトピックを学ぶ。具体的なアプリケーションを通じて、画像分類や自然言語処理、ゲームのプレイなど、多様な課題に対する深層学習の応用方法を学ぶ。また、Google Colabを用いたプログラミング演習を数多く取り入れ、授業の終盤では、グループに分かれて選んだテーマでのプロジェクトを通じ、学んだ知識と技術の実践的な適用を目指す。</p>	講義：15時間 演習：15時間
		システムソフトウェア	<p>Windows, macOS, Linuxなどのシステムソフトウェアあるいはオペレーティングシステムはハードウェアの仮想化・抽象化・保護が大きな役割である。コンピュータシステムのハードウェアには、CPU、主記憶、2次記憶装置、キーボード、ディスプレイ、ネットワーク装置などがある。限られた量のCPUと主記憶において、それ以上の量のハードウェアが必要なアプリケーションを同時に実行できるようにしている仮想化技術、ハードディスクや半導体ディスクなど様々な2次記憶装置をファイル操作という統一操作を提供する抽象化技術、バグのあるアプリケーションや悪意のあるアプリケーションからシステムを守る保護技術、などを学ぶ。</p>	講義：20時間 演習：10時間
ヒューマンコンピュータインタラクション	<p>ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI) とは、スマートフォンをはじめとするコンピュータやコンピュータが組み込まれた機器と、人間との相互作用を研究する分野である。人間とコンピュータのより良い共存のための手法を模索し、より優れた体験を得られることを目指す。</p> <p>この授業では、HCIの概要の理解から始め、人間やコンピュータの情報入出力の特性、HCIの設計のポイントや評価技法、またバーチャルリアリティをはじめ新たに生まれてきている様々なコミュニケーション関連技術について学習する。</p>	講義：20時間 演習：10時間		

専門教育科目	発展科目	統計・情報系科目群	情報分野科目	信号処理	この授業では、基本的な信号処理から音声分析までの一連の知識と技術を習得することを目的としている。信号処理の基礎概念から始め、フーリエ変換やフィルタ設計、サンプリングと量子化などの基礎的なテーマについて学ぶ。これにより、信号処理の基礎を固め、より高度な分析に進む土台を作る。これらの基礎知識を活かした具体的な音声分析をグループに分かれて取り組む。音声の特性を理解し、特徴抽出手法や自然言語処理の基礎についても触れ、最終的には動画から音声を抽出し、文字起こしを行うプロジェクトを完成させる。このプロジェクトの実践を通して、学んだ信号処理の理論の理解を深め、データサイエンスの視点から信号処理の重要性を理解させる。	講義：13時間 演習：17時間
				並列分散システム	高速ネットワークで接続された複数のコンピュータを1台のコンピュータシステムとして利用できるようにしたシステムをクラスタシステムと呼ぶ。膨大なデータ処理をこなすためにクラスタシステムが使われる。現代の代表的スーパーコンピュータはクラスタシステムである。このようなシステムで使われているMPI通信機構、リモートにあるコンピュータのメモリに直接データをアクセスするRDMA (Remote Direct Memory Access) 技術、クラスタシステム上でメモリを共有する技術、クラスタシステムを使ったファイル保管システムである並列分散ファイルシステムなどを学ぶ。LAN (Local Area Network) やインターネット上のコンピュータを利用したシステムは分散システムと呼ばれる。分散システムで使われているRPC通信やpub/sub通信モデルなどのプログラミングモデル、耐故障技術、認証と認可、containerやcloud技術などを学ぶ。	
				IoT	IoT (Internet of Things) は、物理的なオブジェクトやデバイスがインターネットに接続され、データの収集、送信、および相互作用を行うテクノロジーの概念である。具体的には、センサー、アクチュエータ、コンピューターチップなどが組み込まれたデバイスが、ネットワークを介して通信し、データを収集し、リモートで制御されたり、他のデバイスと連携したりすることができる。 この授業では、IoTの基本概念を理解し、センサーやデバイス、それをつなぐネットワークに関する技術を学ぶとともに、IoTデバイスの実装、得られるビッグデータを分析し活用する手法を具体的な事例等を通じて学習する。実際のIoTデータにデータサイエンスの技術を適用し、価値を見出す能力を身に付けることが狙いとなる。	講義：20時間 演習：10時間
				ゲーミフィケーション	この授業では、ゲーミフィケーションの基本原則と実践方法を学ぶ。ゲーミフィケーションは、ゲームの要素を非ゲームのコンテンツに適用するプロセスであり、ユーザーの参加とエンゲージメントを高めることを目的としている。データサイエンスの観点から、学生はゲームデザインの理論、動機付けの心理学、ユーザーエクスペリエンス (UX) の設計、およびデータ分析を通じてゲーミフィケーションの戦略をどのように計画、実装、評価するかを学んでいく。 授業を通じて、ゲーミフィケーションの効果的な応用方法を学び、将来的にビジネスや教育など様々な分野でこの知識を活用できるようになることを目的とする。	
		ビジネス系科目群	経済分野科目	企業経済データ分析	社会人となり企業の一員としてビジネスの課題に向かい合うためには、企業を単なる商品やサービスを生み出す存在として捉えるだけでは十分ではない。この授業では、企業と株主、債権者、従業員、下請け企業などの利害関係者との関係を依頼人・代理人関係と捉えた上で、それぞれの関係が束となって合わさり、有機的につながることで企業経済システムを形成していると考えられる。具体的にはそれぞれの関係を企業統治システム、企業金融システム、雇用システム、サプライヤー・システムに分けて、理論、データの両面から理解を深めていく。特に、日本の長期データを使った歴史的分析、海外データを使った国際比較分析を学ぶ。受講生は、データ分析のレポートに取り組むとともに、小テストで授業内容の確実な定着を目指す。なお、「経済学入門」を既に履修済であることを前提とし、「ビジネス・エコノミクス」も履修済であることを推奨する。	講義：23時間 演習：7時間

専門教育科目 発展科目 ビジネス系科目群 経済分野科目	労働経済データ分析	<p>この授業においては、日本の労働市場で労働需給や賃金について重要な指標とされている時系列データや横断面データについて学び、こうしたデータが何を表しているのか、概念に対して統計が不十分な点はどこか、どのような分析ができるかを提示し、考察することを目的としている。女性や高齢者の労働力率やこれに影響を与える要因、有効求人倍率や失業率の概念と実際の動き、賃金と学歴、勤続、年齢、職種、雇用形態などとの関係と概念的な意味合いおよび国際的にみた日本の特徴、企業側の統計と世帯統計が示す労働時間の乖離とサービス残業、男女の均等、労働組合統計などに目配りしつつ、統計が示す日本の労働の様々な側面とこれに関する研究を紹介していく。</p>	講義：21時間 演習：9時間
	地域経済データ分析	<p>企業はビジネスを行う場所を合理的に選ぶ。その際に、他の企業や消費者の行動や政府の政策も考慮に入れる。他方で、労働者・消費者も企業の立地を考慮して行動する。こうした選択を経済学によって分析する空間経済学・経済地理について、日本のデータを交えて学んでいく。輸送費が企業の立地選択に与える影響、産業の集積が発生するメカニズム、地域間の交易や産業連関、地域間の経済格差、政府の地域経済政策などを取り上げる。地域経済の問題に対する解決策を考えたり、空間にかかわるデータを用いた経済分析を行ったりする際に必要となる経済学の基本的な分析枠組みを理解することを旨とする。「経済学入門」を既に履修済であることを前提とする。「ビジネス・エコノミクス」と「政策評価」も履修済であることを推奨する。</p>	講義：23時間 演習：7時間
	国際経済データ分析	<p>私たちの生活は外国との経済関係なしには成り立たない。グローバル化の進展により国々の相互依存が深まる一方で、政治等の面での対立により国家間の経済関係が断たれるリスクも高まっている。そこで、国際貿易（海外とのモノの輸出・輸入）と海外直接投資（企業の海外でのビジネス活動）に焦点を当て、経済学に基づいて、データも交えて、そのメカニズムを理解することを目指す。それぞれの国は何を輸出するのか、輸入が増えると国内経済はどうなるのか、企業はなぜ海外で事業活動を行うのかなどについて学んでいく。なお、国際経済のうちおカネの流れに関する国際金融は取上げない。「経済学入門」を既に履修済であることを前提とする。「ビジネス・エコノミクス」と「政策評価」も履修済であることを推奨する。</p>	講義：23時間 演習：7時間
	マクロ経済と経済政策	<p>社会人となり企業の一員としてビジネスの課題に向かい合うためには、自社の状況のみならず、刻々と変化していく自社を取り巻く経済環境、すなわち、マクロ経済への理解が欠かせない。しかし、マクロ経済モデル・理論はとすれば初学者にとって難解であり、敷居が高いことは否めない。この授業では理論先行ではなくマクロ経済の捉え方や国全体の経済の活動を示す国民経済生産（GDPデータ）への理解をまず徹底させた上で、物価、労働、消費、投資、景気などの指標のデータの推移やそれを加工した分析に触れることで、生きたマクロ経済を学び、理解を深めること目指していく。その上で、LM-IS分析を通じた財政金融政策の効果や経済成長の決定要因について理論・データ分析両面から学ぶ。受講生は、小テストなどで内容・知識の確実な定着を目指す。なお、「経済学入門」を既に履修済であることを前提とし、「ビジネス・エコノミクス」も履修済であることを推奨する。</p>	
	企業競争と産業政策	<p>市場経済は効率的な資源配分を達成するが、企業の自由な競争に任せては様々な問題が生じることがある。そこで、政府の経済政策のうちミクロの企業・産業に関わる部分に焦点を当て、経済学に基づいて、データを交えて、産業政策を中心とした企業と政府の関わりをデジタル化・グローバル化の流れもふまえて理解することを目指す。「経済学入門」で学んだ市場の失敗や完全競争の復習から始め、その補正のための税・補助金、独禁法などの競争政策、海外との貿易に介入する保護主義や戦略的貿易政策、研究開発にかかわる特許制度、集積にかかわる地域産業政策などを、市場と政府の両方の限界をふまえた上で、日本の制度や政策事例にふれつつ取り上げていく。「経済学入門」は履修済であることを前提とする。</p>	

専門 教育 科目	発展 科目	ビジネス 系科目 群	経済 分野 科目	女性労働	この授業では日本の女性労働と家族形成は他の国々とうどう異なる特徴を持つのか、今後の人口減少社会における労働力不足を見据えて、女性がワークライフバランスをとりながら自身のキャリアを主体的に持つ未来に向けて、何が可能か、そのハードルや可能性について学ぶことを目的としている。2023年のノーベル経済学賞受賞者であるクロードティア・ゴールディン氏は、1900年から最近までの米国の女性労働の変化について日本語訳もされた図書を出版しているが、日本はどうなのか、講師のこれまでの研究から、日本の女性労働と家族形成の特徴について、米国と対比する。その上で、日本と米国の雇用慣行の違いについても考える。今後の現役減少社会を考えれば、日本において、女性がキャリアを持ち子どもも持てるような労働市場を構築することが重要であることは自明である。現状の労働市場の課題と社会的保護のあり方の方向性について、諸論文をもとに論争を示し、将来社会について受講者とともに考える。	
				社会保障	社会保障における税・社会保険の負担の在り方、財源など基本的な仕組みを学ぶ。具体的には、児童に対する社会保障（保育園、児童手当、シングルマザーへの児童扶養手当）や育児休業、育児短時間勤務など、また高齢者への社会保障としての年金制度、介護保険制度、さらに医療保険制度や、雇用保険、労災保険など諸制度について、さらに生活保護や他の福祉政策について学ぶ。その上で、女性は社会保障の中でどう位置付けられているのか、国際的に日本の社会保障はどのような特徴があるのかを考える。また少子化がすすむことは、社会保障の持続を難しくしており、日本社会の持続性、あるいは若者の将来に大きい課題をもたらすが、なぜこれがすすむのか。現行の社会保障はどのようなリスクをどのようにカバーしているのか。自分で社会保障のニュースの議論に関心をもってフォローできるようになり、また基本的な仕組みを知った上で自分の考えを述べられるようにする。	
				金融システム	お金は私たちの日々の生活にとってなくてはならぬもので、お金の流れは経済の「大動脈」といっても過言ではない。金融は経済の中でも私たちが最も身近に感じる分野で、経済の理解のカギともいえる。この授業では、金融システムの役割やお金の流れを理解した上で、まず、私たちにとって身近な、金利、為替レート、株価について、それらがどのようなメカニズムで決まるか、また、その変化の経済への影響などについてデータ分析も援用して徹底理解に努める。その上で、抽象的な理解に止まりがちな貨幣、銀行の役割・実態についても、現実的な理解に努める。最後に、これまで学んだトピックの応用として家計の金融資産運用について考える。受講生は、レポート、小テストなどで内容・知識の確実な定着を目指す。「経済学入門」を既に履修済であることを前提とし、「ビジネス・エコノミクス」も履修済であることを推奨する。	
		経営 分野 科目	戦略データ分析	本講義では、特定の業界・企業を分析対象として取り上げ、ビジネスモデルの調査・検討を行うことで、経営戦略論に関連するデータ分析能力を養うことを目的としている。ビジネスモデル分析の基礎、「ビジネスモデル・キャンパス」を構成する主要要素（顧客・取引先など）に関するデータ分析の基礎（利用可能な既存データソース、独自にデータ収集を行うための手法、データ収集・分析時の注意事項など）に関する講義を受講した上で、データ収集・分析のグループワークを行う。グループ討議を通じて、取り上げた業界・企業のビジネスモデルを整理・分析した上で、最終成果として、分析対象とした企業・業界関係者に対する戦略上の提言を発表する。	講義：14時間 演習：16時間	
			マーケティングデータ分析	マーケティング戦略におけるあらゆる問題を識別、把握、解決するため、人々の意識・行動実態に関するインタビューやアンケート等のリサーチ、各種データ分析が頻繁に行われており、日々その重要性が高まっている。 本講義では、広告会社およびマーケティングリサーチ会社の勤務経験を有する教員が、企業・団体が抱える課題解決のための調査設計、データ収集、多変量解析などの統計分析手法、報告書作成・プレゼンに至る一連のプロセスを実践的視点で指導することで、データサイエンティストとしての分析力を深めていく。	講義：24時間 演習：6時間	

専門教育科目 発展科目 ビジネス系科目群 経営分野科目	人材データ分析	<p>この授業の目的は、組織の成果向上につながる人材データの分析と活用について学ぶことである。より効果的に従業員のパフォーマンスを上げ、組織の成果を向上させるために人材データの活用は企業の喫緊の課題である。</p> <p>授業では、組織における人材データについて理解を深め、さらにはデータ収集、分析、保存・活用できるようにする。分析結果をどのようにプレゼンテーションするのが効果的かについても合わせて学び、さらに先進的なHRアナリティクスについても知識を広げる。</p>	講義：18時間 演習：12時間
	財務データ分析	<p>企業の現状を理解し、未来の方向性を定めるためには、財務データを正確に読み取ることが必須である。この授業では、財務データから企業の実態を診断し、発見した問題をどのように解決すればよいのか、という問題の診断と解決という両面について学ぶ。そのために、財務データを2つの側面、つまり外部データと内部データのそれぞれの活用の視点から学ぶ。外部の視点では、公開されている財務諸表から、その企業に支払能力があるのか(安全性)、その企業は儲かっているのか(収益性)、その企業は伸びていく会社なのか(成長性)を読み取っていく。内部の視点からは、企業の原価は将来どのような動きをするのか、意思決定のためにはどのように財務データを活用すべきか、業績を測定するにはどのように財務データを活用すべきかという点について学ぶ。講義では資料やレジュメでの解説と共に、実際に計算問題を解くことで知識の定着を図る。</p>	講義：23時間 演習：7時間
	イノベーションマネジメント	<p>新しいテクノロジーやイノベーションは、われわれの生活や社会を大きく変えることがある。たとえば、インターネットやスマートフォンはわれわれの生活に深く浸透し、もはやそれなしの生活や社会を想像することすら難しくなっている。本講義では、こうしたイノベーションがどのようにして実現し、いかにして世に広まり、社会にどのような変化をもたらし、関連する産業や企業がどのような影響を受けるのかについて検討することを目的とする。講義では、イノベーションマネジメントの基礎的な考え方を理解し、分析ツールを習得した上で、イノベーションを通じて新たな価値を創造・提供していく方策について議論する。</p>	
	デジタル経営	<p>デジタル技術が企業経営にどのような影響を与えるのか、企業を変えるのかについて、企業の経営者、管理者から実践的に学ぶ授業である。デジタル技術を活用し、企業がいかに効率的に経営しているのかにとどまらない、従来とは異なる経営戦略を変革し、事業やビジネスシステムを創造していくのかについて、複数の事例をもとに学ぶことを目指している。デジタル技術を単にツールとして導入するのではなく、デジタル技術を企業経営や経営変革に組み込む際の障壁やそれを乗り越える考え方や手法について、実践的に学習する。経営戦略を専門とする基幹教員がファシリテーターとして授業を運営していく。</p>	
	起業論	<p>本講義では、国内外で発展してきた企業家活動やベンチャー企業経営に関する経営学、社会学研究の理論的枠組みや事例を参照しながら、事業創造の担い手である起業家の活動の実態について明らかにする。そしてそこから、近年の日本にみられる組織現象に対して、より深い理解力、観察力を養うことを目的とする。講義全体を通じて、「事業創造における経営戦略」、「スタートアップ・プロセス」、「事業創造とネットワーク」「事業創造における組織づくり」の4つを主要テーマとして設定し、事業創造にかかわるさまざまな経営現象を考察していく。</p>	
	消費者行動	<p>どのような要因が消費者の行動を規定するのか知ることは、マーケティングとブランド構築を進める上で、極めて重要である。</p> <p>本講義では、広告会社およびマーケティングリサーチ会社の勤務経験を有する教員が、可能な限り身近な事例を取り上げて、マーケティング論やブランド論、行動経済学など近接領域にも触れながら、学術的な視点に偏ることなく、実務的な視点もバランスよく組み込んで、今日の消費者行動に関する議論を進めていく。</p>	

専門教育科目	経営分野科目	ビジネス系科目群	マーケティング・コミュニケーション		<p>マーケティング戦略・立案における主要要素の1つであるマーケティング・コミュニケーションは、顧客との関係性を円滑にする戦略面だけではなく、経済・社会・文化などにも影響を及ぼしている。また、近年のWEB・SNS普及に伴い、行動につなげる方法論も、変化の只中にある。</p> <p>本講義では、広告会社およびマーケティングリサーチ会社の勤務経験を有する教員が、マーケティング・コミュニケーションに関する理論と、キャラクター活用などの実践事例を織り交ぜながら紹介する。</p>	
			デジタルマーケティング		<p>デジタル端末やSNSが普及をしたことで、これらのツール・メディアを活用したマーケティング戦略の立案が求められている。従来のマーケティング理論を学んだ学生を対象に、デジタルを活用したマーケティングのあり方、具体的な方法、デジタル特有の課題などを学ぶことを目的とする。マーケティング戦略に関連したデジタル技術を解説し、どのような方法があるのかを学び、具体的な事例をもとに効果的な方法を理解できるようにする。また、今後想定されるCookielessなどの新しい動向の解説を行い、実践的な対処法を学べるようにする。</p>	
			キャリア開発		<p>この授業の目的は、キャリア形成と関わりの深いライフイベントと関連させながら、様々なキャリアのあり方について学ぶことである。キャリア開発は組織と個人の相互作用で行われ、組織にも個人にも利益をもたらすと考えられている。</p> <p>授業では、キャリア開発に関わる基本的な知識を獲得したうえで、キャリアに影響を及ぼす要因である結婚、子育てに関する現状を制度面を含めて確認する。これらの知識をもとに、キャリア形成と開発、女性の「活躍」について考える。</p>	
			ダイバーシティ経営		<p>この授業の目的は、ダイバーシティの高い組織にするために必要な知識を獲得することである。組織がダイバーシティを高めることは、組織に多様な人材が存在し、それぞれの能力を発揮できるようにすることも言い換えられる。</p> <p>授業では、ダイバーシティという概念について基礎的な知識を身につけたうえで、組織の多様な人材構成に着目する。女性、高齢者、育児中、介護中などの働く人々の属性や環境による課題を知り、そのような人材の活躍を支援するための制度・支援について学ぶ。</p>	
			会計学		<p>会計は「ビジネスの言語」と呼ばれている。会計の知識が無いままビジネスの世界に飛び込むというのは、大海原に羅針盤と海図を持たずに航海に出るようなものである。また、企業のデータ分析を行う際には、そのデータが意味するところがわからないと正確な分析はできない。企業のデータの大きな要素は会計データであり、会計の構造を知ることは、企業のデータ分析を行うための大前提である。この講義では、「ビジネスの言語」である会計の社会における役立ち、基本的な構造について学ぶことを目的としている。講義では教科書やレジュメでの解説と共に、実際に計算問題を解くことで知識の定着を図る。</p>	
	データサイエンス科目	協働連携プロジェクトA	○	<p>企業と連携し、データサイエンスについて実践的に学ぶPBL演習である。企業の課題をデータに基づいてグループで設定し、解決するプロジェクト型授業である。学生はグループで推進されるプロジェクトに主体的に参加し、プロジェクトを体験することを通じて、データを分析する力と応用する力だけでなく、チームワーク、プレゼンテーション力、リーダーシップを養う。また社会人と触れ合う場が提供される。基幹教員は本演習において企業との調整役、企業と学生の橋渡し役を果たすとともに、演習の取りまとめ役を担う。</p>	主要授業科目	
		協働連携プロジェクトB	○	<p>企業と連携し、データサイエンスについて実践的に学ぶPBL演習である。企業の課題をデータに基づいてグループで設定し、解決するプロジェクト型授業である。学生はグループで推進されるプロジェクトに主体的に参加し、プロジェクトを体験することを通じて、データを分析する力と応用する力だけでなく、チームワーク、プレゼンテーション力、リーダーシップを養う。また社会人と触れ合う場が提供される。基幹教員は本演習において企業との調整役、企業と学生の橋渡し役を果たすとともに、演習の取りまとめ役を担う。</p>	主要授業科目	

専 門 教 育 科 目  発 展 科 目  デ ー タ サ イ エ ン ス 科 目	データサイエンスと心理	<p>心理学とは人の心や行動の仕組みを「科学的」に明らかにすることを旨とする学問で、データを用いた仮説検証が非常に重視されている。この授業では、多様な心理学の研究の中でも、特に対人関係や集団・社会における心理を扱う「社会心理学」を題材に「データを使って人の心と行動の仕組みを明らかにする」とはどのようなことを学ぶ。</p> <p>具体的には、心理学を初めて学ぶことを想定し、(1)社会心理学におけるデータの活用方法のほか、(2)社会心理学の基礎的な理論や研究を講義形式で紹介する。そして(3)応用的なテーマに絞って最新の研究知見も紹介し、「社会心理学と社会の関わり」について理解を深めていく。</p> <p>(2)(3)の両方で、過去に行われた実験や調査の結果を紹介するほか、社会的な出来事との関わりも意識的に取り上げ、学期を通じて「心理学とデータサイエンス」を学ぶことがどのように社会に活きるのかについて一緒に考えることをねらいとする。</p>	
	デザイン思考	<p>変化が激しく予測困難なVUCAの時代における問題解決において、市場やユーザーニーズの調査を元にした従来型の仮説検証型アプローチでは課題の本質を迅速に捉えることが難しいとされている。このような問題解決において着目されているのが、デザイン思考である。</p> <p>デザイン思考とは、設計（デザイン）を行う過程を用いて、ユーザーの課題を定義し、未知の問題に対して最適な解決策を見出すための思考法である。本講義では、問題の定義付けと解決意図を明確にした上で、アイデアの創出と試行を繰り返して、設計を行う。問題解決能力、創造性、協力能力、倫理的意識などを養うことが本講義の目標である。</p>	講義：17時間 演習：13時間
	データ可視化	<p>データサイエンスでは、データの取り扱い方や分析だけではなく、分析結果を、聞き手に対してわかりやすく伝えることまでが求められる。本授業では、データそのものの表現方法、分析結果の伝え方などの理論を学ぶとともに、表計算ソフトを用いた具体的な表現を実践できることを目的とする。授業の前半では、データを表現している具体的な事例をもとに、可視化の重要性を学び、可視化の方法論を理解できるようにする。後半では、表計算ソフトを用いた可視化の方法論を解説し、生徒が自ら手を動かして可視化の作業を行い、正しいデータの可視化を体感できるようにする。</p>	講義：12時間 演習：18時間
	チームマネジメント	<p>組織として目的を達成するためのチームの作り方、チームメンバーにおける目的共有の方法、メンバーのマネジメント方法を学ぶ。特にデータサイエンスのプロジェクトはチームで遂行することが多いため、理論とともに、具体的なデータ分析のプロジェクトを通じて、チームマネジメントのあり方を体感できるようにする。チームマネジメントの重要性を理解させ、具体的なチームマネジメントの成功例・失敗例を紹介することで、まずは概要を理解させる。最終的には具体的なチームづくりを体験させることでチームマネジメントを実践できるようにする。</p>	
	専門特殊講義	<p>データサイエンスの応用に係るトピックスを取り上げる。当面は、医療データに対する取り扱い方や、統計分析の基本を学ぶことを目的とする。最初に医療データと医学研究との関係を解説し、ヒトを対象とした医薬品評価や疾病発生に関する研究のデザインの役割を説明する。各研究デザインやデータ型に対応する統計分析法とその利用例を解説する。また、医療データで扱うことが多い、2値データ、経時測定データ、空間データに対する重要な統計解析手法を解説する。統計解析手法の実装についても解説する。</p>	

専 門 教 育 科 目	発 展 科 目	演 習 科 目	専 門 演 習 Ⅰ	○	<p>社会やビジネスが抱える課題について、データを用いて自分で主体的に設定した仮説を検証するために必要な分析手法を少人数で双方向のやりとりの中で身につけることを目指す。2年間続くゼミの最初に当たる「専門演習Ⅰ」では、まず教科書をみんなで輪読するなどして分析手法の基礎を学ぶ。来学期の「専門演習Ⅱ」で具体的な応用を学ぶ準備運動として知識レベルを揃える意味がある。最終的には、指導教員の専門分野（統計、情報、経済、経営）に基づいて自ら選ぶテーマで進める卒業研究につなげていく。シラバスの詳細については各教員が提示するものを参照してほしい。専門演習Ⅱに加入する前には、各指導教員が指定する科目の履修は済ませておく。なお、各教員が指導する専門分野は以下の通りである。</p> <p>富浦：経済（特に産業、国際貿易、地域経済）についての統計データを用いた計量的な実証分析</p> <p>椎名：統計（特にベイスマデリング、多変量解析）の基礎理論に基づいたモデリングによるデータ分析</p> <p>網倉：経営学（主に経営戦略・経営組織・技術経営）の分析フレームワークを活用し、定量・定性データの分析にもとづいて、ビジネスや社会の課題解決提案を行う</p> <p>石川：インターネットに流通しているデータやアクセスログ等のデータを用いた情報セキュリティに関する実証分析</p> <p>小野：データサイエンス技法を社会展開する際に生じる、倫理を含めた諸問題についてのデータ表現とその分析</p> <p>塩崎：消費者、購買実態についてのデータに基づくマーケティング戦略の立案</p> <p>鶴：経済（特にマクロ経済、金融、企業経済）についての統計データを用いた計量的な実証分析</p> <p>永瀬：経済学（労働経済学と社会保障）についてのデータを用いた定量・定性的な実証分析</p> <p>野澤：経営（特にマーケティングコミュニケーションおよびリサーチ領域）についての事例研究、定量データを用いた分析</p> <p>広瀬：情報（特に教育システム、データの可視化）について機械学習を用いた実証分析</p> <p>本田：情報分野において、AI・IoT技術を活用した社会課題解決に資するサービス実装手法の習得</p> <p>尾崎：情報（特に教育工学、情報教育）についての統計処理や機械学習を用いた実証分析</p> <p>高崎：経営（特に就業、組織行動、組織心理）についての統計データを用いた計量的な実証分析</p> <p>田島：生体情報工学（特に生体情報のセンシングやそのデータ処理・制御）についての統計データを用いた計量的な実証分析</p>	主要授業科目
			専 門 演 習 Ⅱ	○	<p>先学期の「専門演習Ⅰ」で学修した内容を具体的な応用の中で確かめつつ、次学期の「専門演習Ⅲ」と一体で進める卒業研究への着手に備えて、自分の関心事項を専門的な分析につなげていく。卒業研究につながるトピックスについては、指導教員の専門分野に基づいて、学生の関心をふまえて選定することになる。先学期に学んだ分析手法を実際に使って理解を確かなものとするとともに、プロジェクト体験の機会となることを目指す。指導教員の方針や学生の学修進捗により基礎的事項の復習から学生によるテーマ選択に移るタイミングは異なる。同一の教員が指導する「専門演習Ⅰ」と続けて履修する前提である。</p>	主要授業科目
			専 門 演 習 Ⅲ	○	<p>卒業研究に本格的に着手するため、先行研究やデータの利用可能性等について調べ、自らテーマを設定し、データを用いた分析に着目し研究の進捗を随時報告してもらう。来学期に卒業研究を確実に完成させるため、今学期のうちに実行可能な研究計画を固め、予備的な分析にかかっていく。そのため、経過報告について学生相互にコメントし教員からの指導も受け、フィードバックを反映した研究進捗管理をしてもらう。データを用いた分析の学びを確かめつつ、自ら選んだテーマでプロジェクトを完遂する力を高めることを目指す。同一の教員が指導する「専門演習Ⅱ」と続けて履修する前提である。</p>	主要授業科目

専門教育科目	発展科目	演習科目	専門演習Ⅳ	○	卒業研究の完成に向け、研究の進捗を随時報告してもらい、学生が互いにコメントを加え、教員の指導も受けフィードバックをふまえた修正作業を遂行し、最終発表の準備を進めていく。データの分析にとどまらず解決策の提案などに至る研究となることを期待する。そのため、経過報告に対し、進捗に合わせて多面的な指導・助言を適宜加えていく。データを用いた分析の学びを確かめつつ、自ら選んだテーマでプロジェクトを完遂する力を高めることを目指す。同一の教員が指導する「専門演習Ⅲ」と続けて履修する前提である。	主要授業科目
			卒業研究	○	卒業研究は、学部での学修成果の総仕上げとなるもので、専門演習でフィードバックを受けつつデータを自分で分析していった最終発表に至るプロセスを経て完成させる。研究テーマの選定、研究計画の策定、研究の進捗管理、中間報告・最終発表のとりまとめ等が求められる。 なお、研究するトピックスについては、学生の希望・関心と担当教員の研究上の専門分野に基づいて、先行研究やデータの利用可能性を検討しつつ、担当教員と相談して決めることとなる。	主要授業科目
全学共通科目	基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座		新入学生が、この大学で何をどう学ぶかについて考える入門講座である。大人（社会人）として、自分の行為に自分で責任を持つことは、自分の心身の状態を自分でコントロールする必要性を知ることであり、法律的、経済的な自分の権利義務を知る必要性を知ることである。また、卒業後、職業人として旅立つために、大学での学びの中でどのような職業に進むかなどを含めて、人生についての見通しを持てるよう、4年間の学びが人生にどう影響していくかを理解し、本学での学びをどう進めるかを考える。なお、この講座では、大妻コタカ先生が何を考えておられたのかも学ぶ。	
			大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ		大妻学院の使命「学び働き続ける自立自存の女性の育成」の具体化を目標とした科目である。1年生の時に受講した「大妻教養講座」における「大妻での学びと人生（卒業生の回）」での学びを踏まえ、本科目では卒業生による講演を中心とした授業を行う。卒業生から、学生時代の過ごし方を含めた今までのキャリア、現在の仕事内容などを紹介いただき、職場での体験・経験などを通じて得たこと、将来の目標、学生へのメッセージなどをお話しいただく。	
			キャンパスライフとメンタルヘルス		主として思春期・青年期の一般的な心理社会的特徴を概観しながら、大学生がキャンパスライフの中で遭遇する可能性のある危機、あるいはメンタルヘルス上の問題について、その予防や対処方法も含めて学ぶことを目的とする。キャンパスライフの中で、大学生が体験する成長のプロセスは、時に大きな心の揺れを伴いやすく、悩みや危機を経験することもごく自然なことである。本講義では、ストレス、五月病、摂食障害、うつ病、自傷行為、アパシーといった問題や、消費トラブル、宗教カルト、ハラスメント等の具体的かつ身近な話題を取り上げながら、学生たちがより健康的で有意義なキャンパスライフを送れるような講義内容とする。	

全学共通科目 基礎科目 女性とキャンパスライフ	女性と健康	<p>我が国の女性のライフサイクルは、ここ数十年間で大きな変化を遂げている。この講義では、女性の健康に関する問題点を正しく理解し、対策を講じる事は、これからの人生を健康で豊かなものにするために必要不可欠である。講義は生物学的な“女性”の定義から始まり、「月経」、「妊娠」、「(性)感染症」、「食生活」、「喫煙」、「飲酒」、「薬物」、「精神疾患」等をキーワードに、医師、看護師等の専門家により分かり易く行う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)          (105 齋藤宏子／5回)          喫煙・飲酒の健康リスク、仕事と女性の健康、妊娠前・妊娠中の健康管理、母子の健康を担当する。          (109 櫻谷あすか／5回)          ストレスのしくみとストレス疾患、ストレスとうまくつきあうために、仕事のストレスを知る、女性労働者のメンタルヘルスを担当する。          (31 小林実夏／2回)          女子大生における健康観と生活習慣の特徴と危険性、健康対策・疾病予防のための栄養・食事摂取を担当する。          (53 清原康介／3回)          我が国における少子高齢化の歴史と現状、少子化社会の対策・適応策を担当する。</p>	オムニバス方式
	ジェンダーと社会生活	<p>ジェンダーを前提に成り立つ役割分業や格差、種々の社会的制度とジェンダーとの関わりについて、具体的な事象を通して学ぶ。妊娠、出産といった身体をめぐる問題、DV（ドメスティック・バイオレンス）やセクシュアル・ハラスメントなどの性と暴力の構造、労働をめぐる不平等な環境、結婚制度や家族制度の現状、メディアに含まれる女性差別的なメッセージ、セクシュアリティと社会システムのかかわり等々、各授業では日常生活と深く結びついたテーマが設けられる。社会をジェンダーの観点から分析することを通して、自らの生活環境についてとらえなおし、自分の視点をもって生きていくために必要な知識を得ることが目的となる。</p>	
	女性史	<p>「女性史」とは、女性を主体とした歴史、またはジェンダー（文化的に構築された性差）の視点からみた歴史のことを指しているが、女性史を学び、歴史のなかに生きた女性たちへの想像力を手に入れることで、いま女性として生きることを意味を考えていく。また、大妻女子大学の学祖・大妻コタカ先生の教育活動も含め、女子の高等教育機関をめぐる歴史を知ることが、現在の学びの環境である。過去の歴史を理解し、歴史を生きた女性たちの足跡を知ること、自らの社会的位置や生活環境を積極的に解釈し、歴史的知識を自分の人生に活用することを目指す。</p>	
	リーダーシップ開発	<p>この授業は、産業界や地域社会で活躍する女性リーダーから、それぞれのリーダーシップ論やそれを確立した背景や経験、さらに自身の今後の展望に関する講演を聞く。そしてその講演後「男女共同参画社会において必要とされるリーダーシップ」をテーマに講師と学生を交えた対話（それぞれの差異を見つけるコミュニケーション）を行う。</p> <p>この授業では、女性リーダーからの講演と対話を複数回繰り返すことで、自己理解を深めるとともに、女性リーダーに関する様々なロールモデルを通じて、皆さんがこれまで持っていたリーダーシップに対するイメージをブラッシュアップし、自らのリーダーシップ論を再構築することが目的である。</p>	
	リテラシー 日本語A(文章表現)	<p>文章表現力向上を目指す場合、読み手への配慮を忘れずに、しかも、より正確に伝えようとする努力をいとわない、という二つのことが重要になる。したがって、文章表現力向上には、(1)読み手に対する思いやりの気持ちを養うこと、(2)事実関係、意図、感情が正確に伝わるような工夫として表現効果を磨こうとする努力、(3)形式上の決まりを当然のこととして守ろうとする意識を養うこと、等が意識されるべきだろう。</p> <p>本科目はあくまで本学での学生生活の基本となる文章表現力の育成を目指す、社会においても通用する基礎生活力として個人の日本語運用能力を高めていく基盤を作ることも、授業におけるねらいとする。</p>	

全学共通科目	基礎科目	日本語 B (口頭表現)	話し言葉を中心に、日本語を目的や場面に応じて適切に表現し、運用する能力の向上を目指す。「聞き手」を意識して、伝えるべき内容や目的・場面を限定した自己あるいは第三者の紹介や説明を行うなど、話し言葉の実践的訓練を行う。また、筋道を立てて話すために必要な論理的思考力と話し言葉での論理的な表現力を身につけることも重要であることから、説明資料を用いたプレゼンテーションなども行う。さらに、口頭表現においては、書き言葉とは異なり、(3)適切に発声・発音する力も必要となるため、その実践的な訓練を含める。
		日本語 C (読解)	言語としての日本語の特質に対する理解を深めるとともに、情報を的確に受け取り、分析的・批判的に捉え返すことができるような、読解リテラシーの向上を目指す。方策としては、(1)中等教育の(国語科)を補うような、語彙・語法・慣用表現など、日本語に関する知識を確認すること(2)さまざまなジャンルの文章に触れて、自らの問題意識を深め、知的な好奇心を涵養すること(3)一定以上の長さを持った文章の内容を把握し、組み立てや構成を理解すること(4)テキストに対する批判的・能動的なかわり方を可能にするための分析的読解の訓練を行っていく。
		データサイエンス・AI概論	Society5.0の時代において、数理・データサイエンス・AIの素養を持った人材が求められている。一方、数理やデータサイエンス、AIと聞くと難しそうに感じる人もいると思われる。そのため、この授業ではこれらを活用することの「楽しさ」や「学ぶことの意義」に重きを置く。 主に「AI やデータサイエンスが社会にもたらす価値」と「デジタル技術が行き渡る社会における課題」をテーマとして、本学の教員を中心に、具体例や最新動向等を織り込みながら、データサイエンスが様々な事象にどう関与しているかという“ストーリー”を理解してもらう。さらにデータ活用におけるリスクや留意事項についても学ぶ。
	キャリア	キャリアデザインⅠ	キャリアデザインの第1段階として、「職業世界の一部を知る」「自己を知る」「自己を育成する方法を知る」ことを目的とする。職業意識を涵養すると共に、産業界から求められている汎用的能力の育成のきっかけとツールを提供することにより、課内外の学生生活からの学びを促す。 「働くことの意味」「職業への適性と能力」「ライフプラン」「自己分析」「コミュニケーション能力」「チームワーク」「セルフコントロール」を中心に学ぶ。
		キャリアデザインⅡ	キャリアデザインの第2段階として、「実社会・実業界を知る」に主眼を置く。一般的な企業の構造や経営についての知識、および広く産業についての知識を受講者に付与し、もって職業選択の一助とする。前半は企業、後半は産業についての講義とする。 「企業とは何か」「マネジメント(モノ・サービス、ヒト・カネ)」「各産業の概要」について学ぶ。
		キャリアデザインⅢ	キャリアデザインの第3段階として、「内部世界(自己)と外部世界(実社会)を統合する」ことを目的とする。 就職活動時期を目前とした学生に対し、女性を取り巻く雇用環境など現実問題の中での就職意欲を喚起すると同時に、学生生活からの学びと関連づける形での自己理解を促し、事務局主催の、業界研究等、各種就職支援活動の活用へとつなげる。 「日本企業の人事管理制度」「昨今の労働事情」「女性の労働」「ワーク・ライフ・バランスの実践」「コミュニケーション能力」「自己分析(大学生生活の振り返り)」について学ぶ。
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ	今日、大学卒業者に最も強く求められるものは、「汎用能力」(社会人基礎能力)である。具体的には、コミュニケーション能力、問題解決能力、達成意欲などである。しかし、これらの能力は必ずしも知識獲得によって育成できるものではない。 本授業は、外部組織との提携のもと、与えられた実際的な課題に対し、受講生がチーム単位で責任をもって取り組むという体験の場を設定することにより、かかる能力の重要性についての受講者の認識を高めるとともに、受講者相互の刺激により、受講者の潜在的能力を引き出すものである。

全学共通科目	基礎科目	キャリア	キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ	この授業はⅠの発展版とし、履修条件としてキャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ(CDPⅠ)の単位を履修習得した学生とする。具体的な内容は、学生は「プロジェクトリーダー」または「ファシリテーター」という立場でCDPⅠの授業に参加し、CDPⅠの履修生に対してチーム運営をリードすることを、または、チーム運営のファシリテーションを体験する。その後、全プロセスを通してリーダーシップのあり方、チームワークのあり方、ファシリテーションを振り返り、CDPⅠと同様に「汎用能力」をより一層高めることを目的とする。	
	教養科目	人間と文化	文学の世界	この授業のひとつの目的は、ことばと物語の力が、想像力を通じていかに人の心を揺さぶり、新しい認識を形づくるかという文学の持つ力について考えることである。このためには、さまざまな切り口が想定できる。特定の作品の鑑賞と解釈を通じて、その特定の社会と文化を映す物語の中に時空を超えた普遍的人間の精神や思想を読む、というののひとつ。また、複数の作品の通時的関連性や、同ジャンルの歴史的発展の過程を辿るという、文学史的俯瞰によってその本質を考えてみることも可能となるだろう。	
			音楽の世界	学生たちに音楽に対する認識を深め、かつそれを楽しむ糸口を与えることを目的としたものである。ここでいう音楽は、西欧古典音楽に限定されたものではない。日本の伝統的音楽や、世界の様々なエスニシティに根差した音楽もそのなかには含まれている。また若者たちは深くポピュラー音楽に親しみ、音楽なしには彼らの生活は成り立たなくなっているといっても過言ではない。また音楽は、今日では様々なセラピーのなかにも取り入れられている。音楽の心理的・医療的作用も講義の主題となりうる。	
			美術の世界	優れた美術作品の観察と分析を通じて、対象を理解するだけにとどまらず、美的体験を豊かにし、鑑賞能力を養うことを目指す。また、美術の地域や時代による特徴をも把握できるようにして、諸作品の個別化と一般化を通じて、人間生活の中での造形表現の基本となる形体や空間を把握し、的確な観察力や構成力を養うことをねらう。さらには美術作品の記号的側面にも注目し、例えばビジュアルデザインの部門では視覚的な伝達効果を主とするデザインの学習を通して、デザインについて理解を深めるとともに、デザインにおける計画と表示の能力を高める。こうした学習と実践を通して、芸術としての美術の意義を理解させる。	
			映像・演劇の世界	現在は、映像技術の進展と劇場型世界への転進のため、誰でもデジタル機器を駆使してイメージの編集ができるようになり、誰もが期待される役を意識してパフォーマンスを演じられるようになった。つまり「見る」アートから「する」アートへの転換が行われようとしている。この授業では、日常性に入り込んだイメージとパフォーマンスの世界を、歴史的視座の中に置いたり、同時代の他のアートとの往來を絡ませてみたり、具体的な作品をそれぞれの世界の用語で分析してみたりして、これらのアートの本質と人間の本性との係わり合いを深く、また広く論じていきたい。	
			考古学の世界	考古学という学問的な方法について理解を深めることを目的とする。対象地域としては、学生の関心を考慮して、日本周辺をフィールドとした考古学を講義の対象とすることが考えられるが、関係の深い他の地域や、画期的な発見がなされた遺跡、あるいは話題性のある遺跡・遺物などについて世界の他の地域をあつかうことも可能である。またどの時代をあつかうか、あるいはある特定の遺跡・遺物に関して通史的に扱うかなどについては担当者にゆだねられる。したがって先史考古学と歴史考古学を講義の対象にふくむことはいうまでもない。	

全学共通科目 教養科目 人間と文化	ポピュラー・カルチャーの世界	<p>「ポピュラー・カルチャー」論とは、古くは大衆文化論と呼ばれていた。「ポピュラー・カルチャー」は直訳すれば「民衆の文化」となる。古くから受け継がれてきた伝統的な民衆の文化が、都市化とメディアの発達のなかでどのような変容を遂げているのか。そして、村上春樹の小説の大ヒットが示すように「ハイ・カルチャー」と「ポピュラー・カルチャー」の区別も今日また曖昧なものとなってきた。このように本講義の内包する課題は多岐にわたり、メディアと文化に関心をもつ多様な研究者の参加が期待される。</p>
	地域と文化	<p>本科目では、地域の文化・社会について、言語、歴史、政治、経済、宗教、文学、芸術などさまざまな側面を、社会学、言語学、地理学といった単一の分野ではなく複数の分野にわたった「学際的研究」から全体的に理解することを到達目標とする。さらに近年の地球のグローバル化を背景に、特定の地域ではなくいくつかの地域のあいだの交流や関連にも注目し、そこから生ずる種々の政治・経済・社会問題と解決方法にも言及する。</p>
	言語と文化	<p>コミュニケーションを成立させるのは「言語」なのだが、その「言語」は時として（あるいは同時に）いってよいほど頻繁に）コミュニケーションを阻害し破綻させるものでもある。「ことば」は通じる、しかし同時に「ことば」は通じない。言語についてのかような二律背反は、言語観の対立にも引き継がれる。ある言語はその言語固有のやり方で世界を分節する結果、その言語固有の世界観が形成されるのだと主張する考え方が一方、異言語であっても普遍的な心的言語・普遍的言語生成構造の上にその差異が生じているのだと説く考え方もある。果たして人は、「言語」という共通した知性によって相互理解の基盤を得たのだろうか。それとも、異なる言語はそれぞれ独自の文化を生み出すと同時に相互理解を阻む壁ともなるのだろうか。この授業では、空気のように「あたりまえ」で、人間の知的営為の前提と捉えられているもの、それゆえに深くその本質を考えることをしなくて済んできたもの、にもかかわらず、知的営為にとって不可欠あるいは知的営為そのものである「言語」とはなにかについて、さまざまな議論があることを知り、考える機会を与える。</p>
	日本の歴史と文化	<p>日本の歴史を主な対象とし、客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。対象とする時代や事象については、特定の時代を掘り下げて分析することも可能であるし、文化史などから通史的に歴史をあつかうことも可能である。またここでの日本という枠組みも固定的なものではなく、周辺地域との関係や世界史のなかで歴史を見直すという視点も必要であろう。日本列島を中心とする地域の過去の歴史や文化を見る目を養うことによって、現代の日本社会をあらためて見直し、問い直す、視点と視野を開く契機としたい。</p>
	世界の歴史と文化	<p>世界の歴史を対象とし、広い視野で客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。併せて代表的な幾つかの民族と宗教について、その行動や思考の規範となっている教理と心性にも触れたい。対象とする地域・時代や事象については、特定の地域、時代を掘り下げて分析することも可能であるし、特定の事象を通史的にあつかうことも可能である。また、文化圏相互の交流という視点から、平和時の交易や宗教間戦争の事例を、分析することも有益であろう。世界の歴史と文化、民族と宗教を知ることによって、我々をとりまくグローバルな問題について、関心を深め、考えていく契機と視野を獲得できるようにしていきたい。</p>
	哲学と思想	<p>哲学や思想は人類が発生以来、如何に生きるべきかを問い続けて、その問いと答えの繰り返しが集積され、体系付けられたものである。従ってその根本は実生活に即した具体的なものであったので、難解なものではない。教室ではまずこの誰もが経験するような身近な問題から出発し、それぞれの問題意識に基づいて思索してゆくことを練習する。また、哲学の長い歴史を参照し、滋養とすることにより我々が得手勝手に思索してゆくよりも、はるかに思考活動を豊かなものにしてくれる。こうした過去の遺産、そしてそれは現在にまで密接につながっているものであるが、それらに関する基本的知識の習得をも試みる。</p>

全学共通科目 教養科目	社会と生活	人間と文化	日本文化・事情	<p>留学生の受講が優先されるが、履修人数に余裕がある場合には、日本人学生も受講できる科目である。留学生在が日本語・日本文化に興味を持った理由の一つに、日本のアニメやマンガ、アイドルグループがある。留学生と共に、こうした日本の現代文化を鑑賞・分析し、それを育んだ日本の文化事情について学ぶ。</p>	
		子どもの世界	<p>子ども文化という時、学生たちが抱くイメージは多様なものであろう。広い意味での「子ども文化」そのものに、児童学、教育学、体育学、社会学、心理学、歴史学、文化人類学等々のさまざまなディシプリンからアプローチすることが本講義の方向性とし、小説、詩、絵画そして音楽等々、さまざまな芸術作品のなかで描かれた子どもの姿を論じることも本講義のもうひとつの方向性である。「子ども」は生命力や創造性の隠喩でもある。学生たちの「内なる子ども」に語りかけ、それを呼び覚ますような瑞々しい講義としたい。</p>		
		人間の成長と心理	<p>本講義では、人間の生涯に渡る“心・身体・社会性”の成長や発達というテーマについて、主に心理学的アプローチから概説していく。生涯発達の諸局面における様々なライフイベントを横軸として、そこでの心や身体の状態、人間関係や社会の様相、直面するであろう課題や問題について共に考え、受講生各自が自分なりの視点を持つようになることを目指したい。特に受講生の皆さんが当面する青年期・成人期の特徴や課題について、講義を通して共に考えていくことを目指す。</p>		
		日本国憲法	<p>本科目は、わが国の法制度及び法体系の根幹をなす日本国憲法の基本原則と概略を理解することを目的とする。講義の中心は、実定法としての日本国憲法の解釈におかれる。即ち、基本的人権および統治機構に関わる憲法諸規定を、具体的な判例と関連諸法令の分析を通じて、その意味内容を解釈する作業を行う。また、実定憲法の解釈の枠に留まらず、その歴史のないし論理的基礎をなす、英、仏、独、米などの西洋近代社会の構造ないし立憲主義思想の分析、さらには現代の諸外国の実定憲法と比較する。最後に、本科目は現代社会における憲法の最新の問題状況、例えば所謂「新しい人権」（環境権、国際人権など）についても論じる。</p>		
		法律と現代社会	<p>本科目は、現代社会を成立かつ存続せしめている、道徳、倫理、慣習そして法律など、種々の「社会規範」のうち、「法律」に焦点を当てて考察することを目的とする。以下、ここでの法律は法規範の中の、狭義の「法律」ではなく、法規範全体を意味するものとして扱う。</p> <p>第一に、社会規範の中での法規範の特徴を、特に国家権力との関係において明らかにする。</p> <p>第二に、代表的な法領域である、民法、刑法、そして行政法などについて、その基本的な特徴と概略を、具体的な判例を通じて考察する。</p> <p>第三に、法を紛争解決の方法として、動態的、機能的視点から分析する。</p> <p>第四に、現代社会における具体的な法律問題をいくつか取り上げ、法的主体としての我々市民について聴講者とともに考えたい。</p>		
		政治と現代社会	<p>現代社会における「政治」のあり方をできるかぎり多面的に考察することを通じて、「政治」に対するセンスを養うとともに、主権者として「政治」に対する判断や行動の指針を獲得することを目的とする。</p> <p>まず、政治に関する基本概念と、それらを育んだ西洋社会の歴史的・思想的理解をたかめ、近代国家およびそこでの政治の特徴を明確にする。次に、現代社会における政治のシステムと機能を実証的分析も扱う。投票行動分析、政治意識分析などを通じた政治過程論、現代政治論などの領域である。さらに、国際政治史、国際関係論なども扱う。最後に、国家単位の政治行動とは異なる、例えばNGOなど新しい政治主体の役割についても考察する。</p>		

全学共通科目 教養科目	社会と生活	経済と現代社会	<p>21世紀に入って世界経済は、市場のグローバル化が進展する中、近代国家と国民経済の形成においてさまざまな発展段階にある国々が、競争的関係をさらに強める場となっている。先進国が近代国家の枠組を超える方向を模索している一方、新興国は経済の急速な発展に国家の枠組みが追いつかない状況にあり、また途上国は政治経済の近代化が進まないまま伝統社会の仕組みが崩壊しつつある。このような世界経済の状況に、アダム・スミスに確立され、ケインズによる大きな革新を経た、市場と国民経済を分析する経済学の諸理論はいかなる有効性をもつかを検証し、新たなパラダイムの形成を模索してゆく。特に、日本経済が世界経済の中でどのような位置付けにあるかを確認し、高齢社会化など日本経済に特有な問題を明らかにした上で、その解決策をさまざまな角度から考えてゆく。</p>	
		メディアと現代社会	<p>現代社会に生きる私たちは、様々なメディアに囲まれて生活し、各種メディアは人々にとって情報源であるばかりでなく、彼らに娯楽を提供するソースともなっている。そこで、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等のマス・メディアが提供する様々なエンターテインメントについて論じる。またネットや携帯電話を通じて自ら情報を積極的に発信する事は、ネット右翼や学校裏サイトのような負の現象も生み出している。この授業ではこれらのメディアと現代社会にかかわる諸問題について、多様な切り口から考える事を通じ、私たちが世界を認識する方法やあり方を再検討する。</p>	
		家族と現代社会	<p>家族は、社会における基本的人間結合単位であると言える。本科目は、そのような家族の現代社会における位置と特徴を、社会諸科学（社会学、法学、経済学、教育学など）の方法論と視点から、具体的問題の考察を通じて、明らかにすることを目的とする。現代日本における家族の諸側面および諸問題を分析するためには、歴史的、比較社会的考察が不可欠である。</p> <p>伝統的な家族のあり方と、近代以降のあり方には大きな相違が横たわり、それを正確に測定することなしに、現在のわが国の家族のあり方を把握することは不可能である。以上の考察を踏まえて、現在社会における家族の諸問題をいくつか取り上げ、具体的に考察したい。</p>	
		福祉と現代社会（ボランティアを含む）	<p>私たちが暮らす現代社会を「福祉」の視点から取り上げて、履修者が身近な生活課題として受け止めながら考察し、一人ひとりがよりよく生きていくために役立てることを目的とする。今日の社会福祉制度がこれまで歩んできた歴史的経過とその社会的背景やそれらの制度を支えてきた思想、そして制度の運用を行う福祉現場の実践活動の様子などをDVD等で紹介していく。また、国や地方自治体の法令によって制度化された福祉だけでなく、地域住民の自主的な活動によって創り出される市民ボランティア等の活動状況についても紹介しながら、これらの市民活動のあり方や今後の展望について考察していきたい。</p>	
		SDGsと現代社会	<p>当科目ではまずSDGsの全体像と17の目標の相互関係を理解し、本学の教育・研究と目標との関連について、最新動向を踏まえて学ぶ。これらは、①各学部の教育・研究はSDGsとどのように関連しているのか、②得た知識をSDGs課題発見・解決にどのように生かせるかについて、学生自身の「気づき」を促すことが目的である。学生には、1つの目標に対して多角的なアプローチ方法があることを知り、本学における学びは将来にわたって有機的に結びつくことを実感して欲しい。「持続可能な共生社会の実現への貢献」を教育使命の一つとする本学にて、SDGsと自らの興味関心の対象を結び付けて考え、今後、どのように学びを深めたらよいのかを考える契機となる講義を提供する。</p>	
		自然と科学	数学の世界	<p>①微分・積分は、万有引力を発見したニュートンによって作られた。車のメータで見る速度というものが微分概念のひとつの具体例である。速度をきちんと理解できれば、微分が何であるかわかる。この理解のためには、関数と、極限の概念を知る必要がある。初歩から始めて、微分というものを理解するまで進む。</p> <p>②「速度」という概念と、「速さ」という概念は異なる。大きさが速さであり、大きさと向きを持つものが速度である。大きさと向きを持つものをベクトルという。図示するときには矢印で表す。このベクトルの演算などを学ぶと、幾何学において強力な武器となる。このベクトルを別のベクトルに移す行列や、行列の性質を知るために役に立つ行列式も学ぶ。</p>

全学共通科目 教養科目 自然と科学	生活の物理	<p>           日常生活に見る現象の裏にある法則を物理を使って、なるべく数式に頼らず、説明していく。身の回りに溢れる家電製品などは、物理という学問がなければどれひとつとして存在しない。いくつか例をあげる。電子レンジは、第二世界大戦中のレーダの民生品である。電気ポットは、ジュール熱の法則に従って、お湯が沸く。また、日々新聞を賑わす地球温暖化の問題の理解には気象学の知識が必要だが、気象学の基本には物理学がある。            学生の興味ある話題を取りあげ、その裏にある物理法則を明らかにして、物理的考え方を身につけてもらうことを目標にする。         </p>
	生活の化学	<p>           その昔、化学者の夢は錬金術であったと言われる。金でないものから金を作り出すのが錬金術であるが、現在、プラスチックや繊維などは錬金術のごとく石油からつくることができる。ペットボトルからフリースをつくるなんてこともできる。ペットボトルもフリースも、炭素 (C) と水素 (H) と酸素 (O) からできていて、結合の組み合わせを変えるだけで、見かけも性質も違うものに変化させることができるのである。砂糖と紙とサラダ油、見かけは違うが、これも実は主成分はすべて炭素 (C) と水素 (H) と酸素 (O) からできている。どれも、燃やすと二酸化炭素と水になる。このような物質たちの七変化を理解するためには、物質を構成している原子に思いを馳せなければならない。            水も化学物質の1つである。水は水素 (H) 2つと酸素 (O) 1つが結合してできたシンプルな物質だが、特別な性質を持っている。電子レンジで水を含む食品を暖めることができるのはなぜか。それは水の化学構造に秘密がある。            この授業では、物質の性質や化学変化を理解するための化学の基礎を学び、日常生活に散らばっている事柄を化学の目で見てみることを目的とする。         </p>
	科学と環境	<p>           地球環境は、この星が生まれて以来の約46億年間で常に変動し続けており、生命は環境の変動に適応しながらさまざまな生き方を獲得・進化してきた。地球環境の歴史を学ぶことで環境および生命の多様性を学ぶ。近年の環境問題は地球規模(温暖化や砂漠化など)でありながら身近な問題(都市化や食料・エネルギー問題など)でもある。これらの問題の多くは科学の進歩がもたらしたものであるが、こうした諸問題を克服して持続可能な社会を構築するのもまた科学の力である。本講義では、「環境・生命の多様性を学ぶ」と「科学技術の功罪をふまえて未来を考える」という2つの視点を中心に据えて環境問題について考える力を養うことを目的とする。         </p>
	生命の科学	<p>           生命の誕生から始まり、成長に伴う様々な機能を持つようになる分化現象、子孫を残す生殖活動、そして加齢による老化現象、生命の終焉までを様々な観点から、最新の研究成果を踏まえて講義するのが本授業である。近年、ヒトゲノム計画を始めとして多くの生物において分子生物学の研究成果は著しいものがある。このような成果を踏まえて疾病の研究や品種改良などの応用面は言うまでもないが、生命の根本に触れる研究も行われている。このような研究は人類の健康に対する貢献は多大であることは間違いない。一方、本来動物細胞においては受精以降では全能性を欠いているわけであるが、i p s細胞のような人工的に全能性を待つ細胞に対する危険性や倫理面について指摘されている。このように最先端の研究の両面性も学生と一緒に考えていきたいと思っている。            本授業を行うことで学生に生命現象を探究する面白さを学び、科学的な考え方を修得してもらうことが授業目標である。         </p>

全学共通科目 教養科目	自然と科学	宇宙の科学	<p>宇宙の科学に関する発展は目覚ましく、宇宙の起源や進化に関する研究ばかりでなく、惑星探査機による火星などの直接探査、そして宇宙旅行や月旅行も実現間近になっている。宇宙に関する基本的な科学的知識や考え方を始め、人類が宇宙や地球のなかでは極めて小さな存在であることを理解する。この授業では古代や中世の宇宙観を始め、宇宙の起源や進化、太陽系と地球の起源と進化、宇宙開発についてビデオ等の画像を用いて解説する。</p> <p>宇宙は137億年前にビッグバンと呼ばれる超高温の火の玉として始まったとされているが、ビッグバン後には星や銀河が生成し宇宙の構造が形成された。太陽系は46億年前に誕生し、太陽を中心に8つの惑星とその衛星などから構成される。太陽系と同時に誕生した原始地球は、微惑星の衝突で生成したため高温であったが、冷却するにつれて海洋が生成し陸地が形成された。宇宙開発は1957年の人工衛星の打ち上げの成功に始まるが、その後人類は月面に降り立ち、スペースシャトルや宇宙ステーションの開発に成功し、宇宙旅行の基礎ができた。宇宙の巨大な時間的空間的な広がりを理解し、これからの宇宙と人類のあり方を言及する。</p>	
		人類の進化	<p>この授業では、まず生物分類および学名について解説し、その後、生命誕生から現在に至るまでを通覧しながら人類進化の概要、すなわち人類の誕生から世界各地への拡散移住の過程を解説する。とくに近年詳細な部分にまで理解が及ぶようになった人類のアフリカ単一起源説を基に、人類進化の特徴を理解してゆく。また併せて、進化過程で獲得してきた人体の構造と機能について解説する。また日本人の起源についても解説する。以上の知識をもとに、近未来生活において人類自らが制御する温度や照明など環境要因への適応の問題、およびロボットとの共存が想定される生活と人間観について、学生諸君の意見を求めながら考える。</p>	
		自然科学の歴史	<p>自然科学は、人間のあくなき知的欲求から生み出された輝く宝石のような結晶である。人間は、自然科学の知識を活用することで、物質的にも精神的にも豊かな社会を築いている。授業では、自然科学の歴史の夜明けから解説し、人類の歴史の中で、どのような科学的思想や科学的概念が生まれたかについて、自然科学の方法論とともに学ぶ。また、それらの科学的知識がどのようにして体系づけられ、現代のような自然科学が発展してきたかについて基礎から学ぶ。こうした歴史に関する知識を背景に、現代社会における、人間と自然科学の付き合い方について考える。また、自然科学は常に発展途上段階にあるため、今後の展開を含め、自然科学の未来についても考える。</p> <p>授業を通して、自分の中にある知的好奇心と人類の進歩や未来像との深い関わりを意識することを目標とする。</p>	
	スポーツ	スポーツ A	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことから本授業では、生涯スポーツの中でも愛好者の多い卓球・バドミントン・テニス・ゴルフなどの個人スポーツを中心に授業を実施する。</p>	
		スポーツ B	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことから本授業では、健康づくりのための体力を高める・技を高めるためのスポーツ実践として、エアロビックスタンス・ウォーキング・ランニングや器械運動（トランポリン）などを中心に授業を実施する。</p>	

全学共通科目 教養科目 スポーツ	スポーツC	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことを踏まえ本授業では、チームで協力して課題を解決し、コミュニケーション能力及び、スポーツ技能を高めるために、バレーボール型・バスケットボール型・ベースボール型などのスポーツを中心に授業を実施する。</p>
	スポーツD	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことから本授業では、健康でしなやかな日常生活を送れるように、軽いエクササイズ（ヨガ・ピラティス等）やストレッチを通して、自己のからだについて気づきを促し、身体のコンディショニングを行う。</p>
	シーズン・スポーツ	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことを踏まえ本授業では、学外での集中授業を（夏季はカヌー、冬季はスキー・スノーボード）通してそれぞれの技能を習得し高めると共に、自然と触れ合い、またそこに集う人たちとの交流を通して、コミュニケーションを高めることを目的として授業を実施する。</p>
	スポーツと健康	<p>現代社会は、都市化、高齢化、労働環境の変化にともなう自由時間の増大といったライフスタイルの変化、また、科学技術の進歩や経済成長による生活の効率化がもたらした慢性的な運動不足やストレス傾向等にあつて、心身の健康を自ら維持管理することや、運動・スポーツ・野外運動を積極的に行うことは、現代人にとっては必要不可欠であると考えられる。</p> <p>「健康」「運動」「スポーツ」の実践の基礎となる理論的な事柄について理解を深めていくことを目的に、①生活とスポーツ②生活とスポーツ技術③生活と体力④生活とトレーニング⑤女性とスポーツなどについて解説し、自らが生涯にわたって心身ともに健康で豊かな生活を営むための「健康・スポーツ」について考える機会とする。</p>
	レクリエーション論	<p>レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というようにならってきた。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。この授業では、レクリエーションの基礎理論を学び、必要とされる地域社会等におけるレクリエーションの重要性や必要性、さらには支援方法等について理解を深めることをねらいとする。なお、この授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。</p>
	レクリエーション実技	<p>レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というようにならってきたのです。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。この授業では、レクリエーションでの人と人とを結びつけるためのコミュニケーションワークや目的に応じたレクリエーション・ワーク等の指導・支援技術や方法などを習得し、多くの人たちを結び付けるための基礎的能力の育成をねらいとする。なお、この授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。</p>
	特 殊 教 養 講 義	教養特殊講義

全学共通科目 外国語科目	英語 I A	英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、高校までに習得した英語力を実際のコミュニケーションに活かす訓練を行う。高校までの間に学んだ英語は「知識」として脳に蓄積されているはずである。しかしいざその「知識」を使ってコミュニケーションを行なおうとすると、簡単な表現さえ発することが出来ないのが現状ではないだろうか。このコースでは、「知識」としての英語を「道具」として使えるようになることを目標とし、コミュニケーション技術向上のための基礎構築を目指す。
	英語 I B	英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、平易な語彙や文法を用いつつ、人間関係を築く基となるコミュニケーション能力を磨く。前期の英語 I Aを受講することで英語のみの授業に慣れ、英語を「道具」として使うための基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその「道具」を使ってコミュニケーションを行い、会話を継続・発展させる訓練を行うと共に、自分の意見を分かりやすい言葉で表現して発表する機会も設ける。
	英語 I C	英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。高校までの間に、入試問題で出題されるような英文読解力や英作文力は既に身につけているはずである。しかし、本来読み書きの目的はコミュニケーションである。このコースではその原点に戻り、基礎的な英語で書かれた文章を読んで理解し、それに倣って文章を作成するという訓練を繰り返し行い、書面によるコミュニケーション技術の構築を目指す。
	英語 I D	英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。前期の英語 I Cを受講することで、センテンスレベルの英語による書面コミュニケーション技術の基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその技術を発展させ、基礎的な英語で書かれた文書を読んで書き手の意図を理解し、簡単な英語でそれに返答するという書面によるコミュニケーション技術の向上を目指す。
	英語 II A	英語 I A・英語 I Bを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をセンテンス・レベルから発展させ、パラグラフ・レベルでその大まかな内容を把握できるように目指す。扱うトピックは世界の人々の暮らしや環境、世界各地の都市の様子など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、海外旅行を想定した旅行英語の要素も取り入れ、英語力の実践的な利用を目指す。さらに、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、1年次に培った協調性を磨くことも目指す。
	英語 II B	英語 I A・英語 I B・英語 II Aを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をパラグラフ・レベルで理解できるように目指す。また、相手の話に耳を傾けてそれに反応し、自分の意見や感想を加えてパラグラフ・レベルで表現する訓練も行う。扱うトピックは世界中の家族のあり方や最新のテクノロジー、個人固有の嗜好など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、より豊かな協調性を身につけることも目指す。

全学共通科目 外国語科目	英語ⅡC	<p>英語ⅠC・英語ⅠDを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずにその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書きこなすことを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。</p>
	英語ⅡD	<p>英語ⅠC・英語ⅠDを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずにその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書きこなすことを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。</p>
	英語ⅢA	<p>今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べて討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。</p>
	英語ⅢB	<p>今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べて討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。</p>
	フランス語Ⅰ	<p>初めてフランス語に接する人のためのクラス。まずはフランス語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方（綴りと発音の関係）、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、フランス語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しみや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>

全学共通科目 外国語科目	フランス語Ⅱ	<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級フランス語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がフランス語できちんとできるようになることを目指す。</p>
	フランス語Ⅲ	<p>フランス語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、フランスの雰囲気を映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたフランス語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>
	フランス語Ⅳ	<p>全学共通教養科目としてのフランス語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、フランスと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とフランスの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたフランス語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>
	ドイツ語Ⅰ	<p>初めてドイツ語に接する人のためのクラス。まずはドイツ語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、ドイツ語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>
	ドイツ語Ⅱ	<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ドイツ語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がドイツ語できちんとできるようになることを目指す。</p>
	ドイツ語Ⅲ	<p>ドイツ語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ドイツの雰囲気を映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたドイツ語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>
	ドイツ語Ⅳ	<p>全学共通教養科目としてのドイツ語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ドイツと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とドイツの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたドイツ語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>

全学共通科目 外国語科目	スペイン語Ⅰ	<p>初めてスペイン語に接する人のためのクラス。まずはスペイン語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。</p> <p>CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、スペイン語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しみや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>
	スペイン語Ⅱ	<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級スペイン語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がスペイン語できちんとできるようになることを目指す。</p>
	スペイン語Ⅲ	<p>スペイン語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、スペインの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたスペイン語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>
	スペイン語Ⅳ	<p>全学共通教養科目としてのスペイン語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、スペインと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とスペインの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたスペイン語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>
	ロシア語Ⅰ	<p>初めてロシア語に接する人のためのクラス。まずはロシア語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。</p> <p>CD等を用いて基礎会話の訓練を行ない、やさしい文章を読んだり、文型の反復練習をすることによって、ロシア語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しみや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>
	ロシア語Ⅱ	<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ロシア語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がロシア語できちんとできるようになることを目指す。</p>
	ロシア語Ⅲ	<p>ロシア語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ロシアの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたロシア語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>

全学共通科目 外国語科目	ロシア語Ⅳ		<p>全学共通教養科目としてのロシア語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ロシアと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とロシアの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたロシア語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>	
	中国語Ⅰ		<p>初めて中国語に接する人のためのクラス。まずは中国語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、中国語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しみや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>	
	中国語Ⅱ		<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級中国語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が中国語できちんとできるようになることを目指す。</p>	
	中国語Ⅲ		<p>中国語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、中国の雰囲気を映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた中国語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>	
	中国語Ⅳ		<p>全学共通教養科目としての中国語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、中国と日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本と中国の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた中国語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>	
	韓国語Ⅰ		<p>初めて韓国・朝鮮語に接する人のためのクラス。まずは韓国・朝鮮語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、韓国・朝鮮語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しみや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>	
	韓国語Ⅱ		<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級韓国・朝鮮語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が韓国・朝鮮語できちんとできるようになることを目指す。</p>	

全学共通科目	外国語科目	韓国語Ⅲ		韓国・朝鮮語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、韓国・朝鮮の雰囲気や映画でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		韓国語Ⅳ		全学共通教養科目としての韓国・朝鮮語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、韓国・朝鮮と日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本と韓国・朝鮮の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた韓国・朝鮮語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		日本語Ⅰ		日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、聞くことと話すことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
		日本語Ⅱ		日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、読むことと書くことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
		日本語Ⅲ		日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、受講という学習活動に必要な日本語を総合的に訓練する。講義を聴き、ノートを取り、質疑、応答に対応して、内容を理解するという流れと、理解、整理した内容に対する詳細を補足的に調べることで、さらに内容の理解を深める方法を学ぶ。	
		日本語Ⅳ		日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、学術上の表現・発信活動に必要な日本語をコミュニケーションに訓練することで、日本の大学の学習活動のあり方とその流れを理解する。また、まとまった意見として口頭で発表するプレゼンテーションを通し、文化的、倫理的約束事に配慮しつつ産出する方法を学ぶ。 具体的には、講義で出された課題を実施する際、下調べを行い、その調査に基づいて他の学生と意見交換を行うのであるが、掲示板、メール、板書においては文書で、また、グループ活動では口頭で意見交換しながら、考察を深める練習を行うものである。	
		外国語特殊演習		この授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。	
	地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅰ		この授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をとおして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。	
		地域文化理解Ⅱ		この授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をとおして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。	

全学共通科目 地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅲ	<p>この授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をとおして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。</p>
	国際理解（海外研修）Ⅰ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定する。</p>
	国際理解（海外研修）Ⅱ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定する。</p>
	国際理解（海外研修）Ⅲ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定する。</p>
	国際理解（海外研修）Ⅳ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定する。</p>

全学共通科目	地域文化・国際理解科目	国際理解（海外研修）V		<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。</p>	
	博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論		この授業では生涯学習の理念や制度などを学ぶとともに、実践例を通して図書館司書・博物館学芸員などの実務において必要となる基礎的な知識や方法を習得することを目標とする。	
		博物館概論		博物館学芸員資格取得のための必修の授業である。多くの博物館を対象にしなが、歴史系博物館を中心に、博物館の本質、機能や役割、業務の内容、学芸員の仕事とともに、博物館に関連する法律など一般的な基礎知識を学ぶことを目的とする。	
		博物館経営論		博物館の社会的役割・財政・組織・設備・運営などについて基本事項や実践的内容を学び、博物館に携わる人物に求められる基礎知識、理解を養います。加えて、昨今の博物館をめぐる状況・課題も取り上げ、問題点を整理し、現代社会における博物館の目的・位置づけを考えられる能力を育成する。	
		博物館資料論		この授業では、博物館で行われている資料の収集・保管、調査・研究等の事業の内容について、日本及び欧米諸国の主要な博物館・美術館等の紹介を織り交ぜながら具体的に示し、博物館資料に対する理解を深めるとともに、資料の基礎的な取り扱いと製作のスキルを育成することを目的とする。	
		博物館資料保存論		資料の保存は博物館の大きな役割である。ここでの保存とは、単に失くさない、壊さないということではなく、歴史の物的証拠である種々の資料を良好な状態を保ったまま、次世代に引き継ぐということである。そのためには、防犯や防災対策はもちろんのこと、温湿度変化や光、気中化学物質などの環境要因や虫カビによって引き起こされる変質を防ぐための対策が必要となる。本授業では、博物館において必要とされる資料保存のための環境、またこれを維持するための構造や空間配置、設備、管理体制などに関して概観する。	
		博物館展示論		博物館の①収集保存、②調査研究、③展示公開、④教育普及の4つの役割を踏まえて、博物館の展示の理念と実際について解説する。講義の構成は、「博物館の役割」、「博物館の歩み」、「博物館と展示の理念」、「展示の企画と実践」の4部構成で、それぞれについて、歴史系地域博物館の実例をもとに紹介する。	
		博物館情報・メディア論		博物館資料データベースを基に博物館活動に関わる様々なメディア（図録、展示パネルなど）を再構成する基礎的能力を習得できるようにする。	
		博物館教育論		社会教育機関としての博物館の役割、エデュケーターとしての学芸員の役割を理解すること。学芸員として学習者の特性や発達段階に応じて適切な理論と方法を選択し、生涯学習に繋がる基礎的能力を涵養する。	

博物館学芸員課程に関する科目	博物館実習		<p>博物館学芸員として必要な基礎的知識および技術、心構え等について実習する。また、学内の博物館施設「大妻女子大学博物館」あるいは博物館に認定された学外の施設で実習を行うので、その際に必要となる事項や留意すべき点などについて学習する。</p> <p>「博物館実習」は3つの内容から構成される。</p> <p>(1) 講義や実技を含む学内実習 (2) 見学実習および巡見 (3) 実際の博物館での館園実習である。</p> <p>(オムニバス方式／全30回) (32 是澤博昭／15回) 博物館見学実習、博物館館務実習、事前事後指導を中心に担当する。</p> <p>(56 下田敦子／15回) 博物館実務実習を中心に担当する。</p>	オムニバス方式
	文化史A		<p>日本文化の変遷について概観し、その基層となる旧石器時代から弥生時代にかけての日本の文化とその背景について、衣・食・住、まつり・墓・家族などさまざまな角度から学ぶ。あわせて、実際の資料に触れることを通し文化史を学ぶ意味についても考える。</p>	
	文化史B		<p>日本文化の変遷について概観し、その基層となる弥生時代から天平時代にかけての日本の文化とその背景について、衣・食・住、まつり・墓・家族などさまざまな角度から学ぶ。あわせて、実際の資料に触れることを通し文化史を学ぶ意味についても考える。</p>	
	美術史A		<p>西洋美術の源流にある古代ギリシア・ローマの美術からルネサンス美術までをとりあげ、博物館学芸員を目指す者にとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標としている。</p> <p>また、美術史の基礎的な事柄を習得することを目的とする。</p>	
	美術史B		<p>西洋美術の、バロック時代（17世紀）から20世紀までの作例をとりあげ、博物館学芸員を目指すものにとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標とする。</p>	
	民俗学A		<p>民俗学の主な対象の一つに、日本の伝統文化の中心をなす神社仏閣と祭りや年中行事がある。この授業では、日本の神社仏閣、祭りや年中行事、人生儀礼、世界から輸入され日本化した行事などの伝統や文化を、民俗学的に明らかにする。また、今に至る歴史的な変遷を捉え、現代的な文化として創造された伝統や文化について、その持続された部分と変容した部分をも検証する。</p>	
	民俗学B		<p>民俗学の研究方法、概念について、現代につながる歴史学を視野に入れながら概説する。また日本の伝統と文化が外国文化をも採り入れつつ当時の現代文化として創造され、かつ今もお継承され続けていることを、具体的な事例を考察しながら明らかにする。</p>	
図書館司書に関する科目	生涯学習概論		<p>この授業では生涯学習の理念や制度などを学ぶとともに、実践例を通して図書館司書・博物館学芸員などの実務において必要となる基礎的な知識や方法を習得することを目標としている。</p>	

図書館司書に関する科目	図書館概論		「図書館概論」は、図書館学課程を学ぶ際の起点となる科目である。図書館の意義、サービス、資料、経営、歴史など、図書館学の体系や内容について広く浅く解説し、図書館学課程の専門的科目を学ぶための基礎知識を深め、図書館マインドを身につけることを目標にする。	
	図書館情報技術論		本講義では、図書館で働いていく上で、必要となる基礎的な情報技術について理解を深める。基本的な知識としてコンピュータ、ネットワークについて学修する。その上で、現代の図書館で日常的に利用するデータベース、電子文書、図書館業務システムについても講義する。また、新しい動向として、メタデータやソーシャル・ネットワーキング・サービス、デジタルアーカイブ等の動向についても理解を深める。	講義：26時間 演習：4時間
	図書館制度・経営論		図書館の設置および運営がどのような制度に基づいているのかを学ぶ。 また利用者の視点に立った図書館経営の在り方を考えていくために、図書館経営に関わる組織、管理・運営、各種計画に関する基本的な知識とともに、図書館に関する法律、関連する領域の法律について解説する。	
	図書館サービス概論		生涯学習施設として、大きな役割を期待される図書館のサービス理念、特質、内容（課題解決、障がい者・高齢者・多文化サービスなど）、方法（貸し出し、レファレンスサービス）等について、公共図書館を中心に説明する。授業を通して、図書館司書として、サービスを担う力を育成する。	
	情報サービス論		この科目では参考業務（レファレンスサービス）を、より広義に情報サービスと捉えて、取り上げるとともに図書館という場を越えたさまざまな情報サービスについても理解することを目標とする。また、情報検索サービス、サービスを行うための情報資源、図書館利用教育、発信型情報サービスなどにも言及する。それにより、図書館の情報サービスを担う知識を育成する。	
	児童サービス論		本科目では、乳幼児からティーンズ層を対象とする公共図書館の児童サービスについて解説する。発達段階に合わせた幅広い資料を紹介し、児童向けの図書館資料についての基礎知識の取得を目指す。子どもと資料を結ぶための方法や技術などの実演を盛り込み、子どもの読書の意義について具体的に学ぶ。	講義：18時間 演習：12時間
	情報サービス演習（1）		情報サービスの設計から評価に至る各種業務、利用者の質問に対するレファレンスサービスと情報検索サービス、積極的な発信型情報サービスを行うための知識・能力を身につけるための演習を行う。 それを通して、司書として、情報サービスを担う力を育成する。	
	情報サービス演習（2）		データベースの紹介や検索システムの仕組みなど、情報検索の基本的な知識を解説し、コンピュータを用いた情報検索の演習を行う。演習では検索エンジンを活用した情報検索や、図書館資料検索のためのデータベース活用方法を学ぶ。	
図書館情報資源概論		「図書館情報資源概論」では、大きく「資料論」、「出版流通論」、「蔵書論」の3部構成で資料について解説するとともに、蔵書の評価についても触れ、図書館が扱う資料の種類や特徴、入手方法や蔵書の構築方法などについての知識を深めることを目的とする。		

図書館司書に関する科目	情報資源組織論		本授業では、図書館全体の業務の流れに位置付け、分類と目録を解説する。印刷資料・非印刷資料、電子資料、及びネットワーク情報資源からなる図書館情報資源の組織化の理論と技術、書誌コントロール、書誌記述法、主題分析、メタデータ、書誌データの目的と意義および基礎的な内容について学習し、理解を深めることを目的とする。	
	情報資源組織演習		「情報資源組織論」で学ぶ情報資源組織化の基本的方法をスキルとして習得することを目指し、情報資源の主題分析と記号化、統制語彙の適用、目録データ作成等の演習を行う。具体的には、『日本十進分類法』(NDC)、『基本件名標目表』(BSH)、『日本目録規則』(NCR)という三つのルールブックの構成と、その使用方法を学ぶ。	
	図書・図書館史		図書・図書館史では図書館サービス特論(2)と合わせて授業を構成している。 この授業では、図書をはじめとする各種の資料やメディアの歴史と、日本と外国の図書館の歴史について学ぶ。教科書を基本として、講義資料で重要な部分の解説を読み、インターネット上の情報源も参照しながら理解を深める。歴史を理解することによって現在のメディアや図書館を認識する新たな視点を獲得させることを目的とする。	
	図書館サービス特論(2)		図書館サービス特論(2)では図書・図書館史と合わせて授業を構成している。 この授業では、図書をはじめとする各種の資料やメディアの歴史と、日本と外国の図書館の歴史について学ぶ。教科書を基本として、講義資料で重要な部分の解説を読み、インターネット上の情報源も参照しながら理解を深める。歴史を理解することによって現在のメディアや図書館を認識する新たな視点を獲得させることを目的とする。	
	図書館情報資源特論(2)		図書館情報資源特論(2)では図書館基礎特論と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。 ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス	
	図書館基礎特論		図書館基礎特論では図書館情報資源特論(2)と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。 ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス	